

青年招へい事業
アフターケア調査チーム報告書
平成9年(1997年)度

平成10年3月

国際協力事業団

JICA LIBRARY



J 1147586(0)

青招
JR
97-27

青年招へい事業
アフターケア調査チーム報告書
平成9年(1997年)度

平成10年3月

国際協力事業団



1147586 {0}

インドネシア



12月10日
KAPPIJA-21主催
歓迎会出席者一同

12月10日
Labschool訪問
教職員及び生徒との意見交換

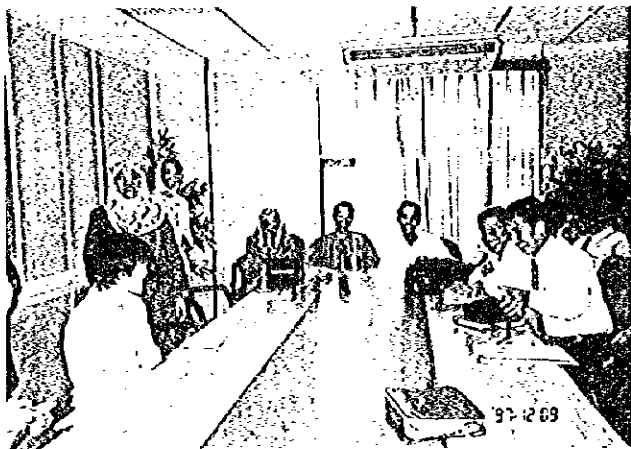


12月11日
ジャカルタ市内の小学校にて

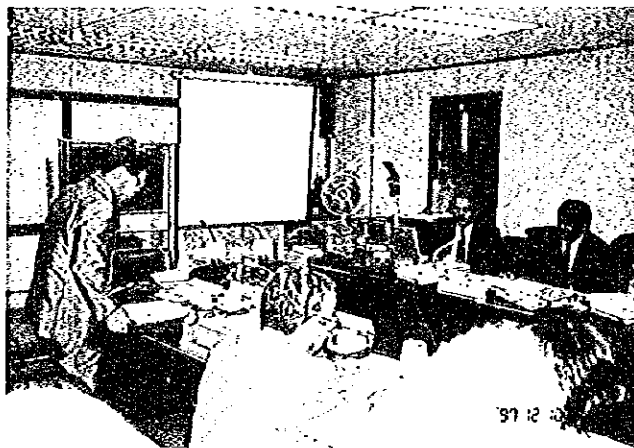
12月14日
ブンチャックにてKAPPIJA-21の
メンバーとのハイキング



マレーシア



12月9日
人事院東方政策課会議室にて
帰国青年と懇談



12月10日
マレーシア教育省訪問



12月12日
国立青年研修センター訪問

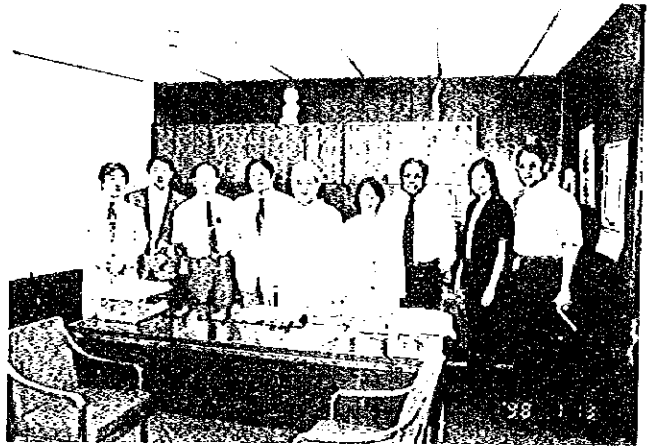
12月13日
テイテイワングサにおける団長
主催夕食会同窓会ラーマン会長
他同会役員会員と懇談



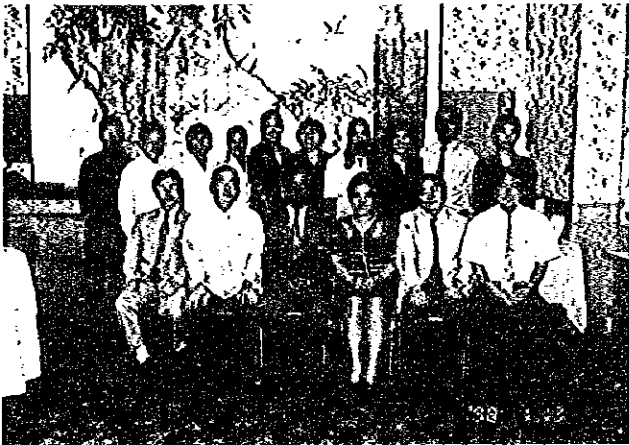
フィリピン



JICAフィリピン事務所にて
後藤所長、石賀職員、オルティス職員と共に



フィリピン外務省にて
アジア・太平洋局長の部屋で
「21世紀の友情計画」担当者と共に



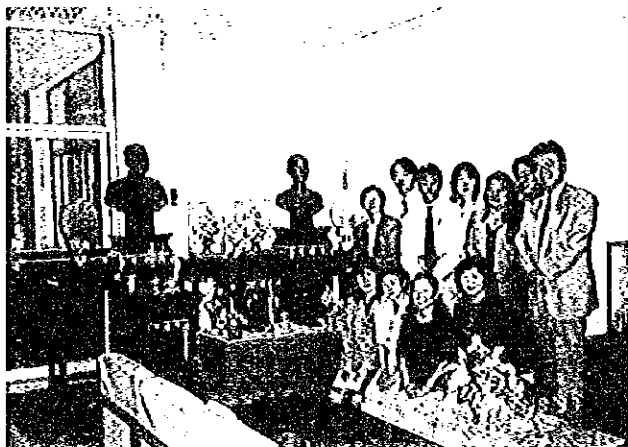
JICA職員・フィリピン同窓会

帰国青年の職場訪問(大統領府)



帰国青年との交流





国立青年局訪問

帰国青年の職場の学校にて
踊りを披露してくれた生徒たちと



帰国青年の蘭園にて

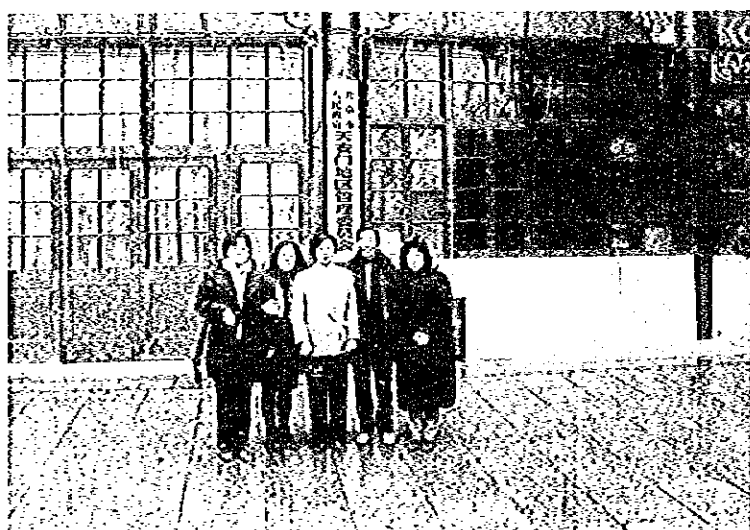
Thank Youパーティーにて
帰国青年たちと



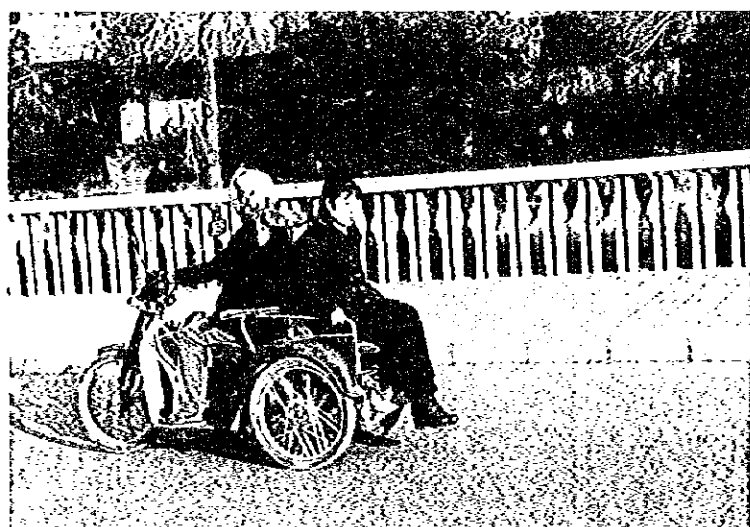
中国



中華全国青年連合会訪問



青年の職場訪問
～北京市人民政府天安門
地区管理委員会



北京瞬景

目 次

I. 概要報告	1
II. 国別報告	5
1. インドネシア	7
2. マレーシア	39
3. フィリピン	61
4. タイ	81
5. 中国	105

[国別報告構成]

I. 調査目的

1. 調査目的
2. 調査内容
3. 調査団員

II. 調査結果

1. 日程
2. 主要面談者
3. 調査結果概要
4. 現地調査・活動内容結果
(表敬・訪問先における意見交換や聴取内容／帰国青年活動状況／セミナー・交流会／ホームステイ／その他)
5. 所感及び提言

I. 概要報告

I. 概要報告

1. 目的

青年招へい事業において、わが国での交流プログラムに参加した日本人青年等をASEAN諸国等に派遣し、ASEAN青年の本邦招へいをもって開始された本事業を双方向の交流に発展させ、本事業参加経験者の日本理解及び研修成果をさらに深め、再交流を促進し、来日時に形成された友情をより発展させ、永続的な友情関係を樹立することを目的とする。

2. 派遣対象者

分野別都内プログラム関係者、分野別地方プログラム関係者、共通プログラム関係者等
「青年招へい事業」日本側関係者

3. 派遣国及びチーム編成

平成9年度は、ASEAN4カ国及び中国に対し、1カ国につき1チーム、合計5チーム(23名)を派遣した。各チームは、チームリーダー1人とチームメンバーにより編成されている。

4. 派遣日程

派遣国	実施協力団体	派遣期間
インドネシア	財団法人 世界青少年交流協会	平成9年12月9日～12月15日
マレーシア	とまこまい国際交流センター	平成9年12月8日～12月14日
フィリピン	社団法人 国際交流サービス協会	平成10年1月12日～1月17日
タイ	社団法人 青年海外協力協会	平成9年12月17日～12月26日
中国	社団法人 青少年育成国民会議	平成10年2月15日～2月21日

II. 国別報告

インドネシア

平成9年12月9日～12月15日

財団法人 世界青少年交流協会

I. 調査目的

1. 調査目的

- ・ 青年招へい事業によって訪日したインドネシア青年の帰国後の活動状況や、現地同窓会、関連施設の視察、ホームステイなどを通じてインドネシアにおける本事業の効果と今後のプログラムの改善点についての調査を行う。
- ・ 調査に際し、インドネシア側関係団体との意見交換を行い、本事業に対する評価要望の聴取、および相互理解の促進を図る。
- ・ インドネシアの文化、社会、経済事情などに関して見聞を広め、今後のプログラムの作成、ならびに改善に寄与する。
- ・ 訪日インドネシア青年および関係者諸氏との再会をもって、ますますの日本理解および交流・関心の継続を図る。

2. 調査内容

- (1) 国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency : JICA) インドネシア事務所訪問
 - ・ インドネシアの国情、JICA の活動状況および青年招へい事業運営状況概説
- (2) インドネシア日本大使館訪問
 - ・ インドネシアの国情および日本との関係についての概説
- (3) インドネシア共和国内閣官房訪問
 - ・ 青年招へい事業によって来日する青年の選考基準、帰国青年との関わりなど事業運営状況に関する聴き取りと意見交換
- (4) インドネシア共和国帰国青年連絡組織 (同窓会組織 Kelaraga Alumni Program Persahabatan Indonesia Jepang-Abad-21 : KAPPIJA-21)
 - ・ 組織活動状況聞き取り、青年招へい事業に関する意見交換
- (5) 帰国青年活動現場等視察
 - ・ 帰国青年が職場、地域において日本での研修、および体験で得た「知識」ならびに「成果」をどの様に活かし活動しているか、実地調査を行う。また、ジャカルタ周辺においてインドネシアの事情、産業把握のための適所の訪問を行う。

[訪問先]

- ・ Sekolah Yayasan Pembina IKIP Jakarta (Labschool)
- ・ American-Indonesian Collage (LIA 財団)
- ・ Iwan Tirta Co.
- ・ Yayasan Kesejahteraan Anak Indonesia (YKAI, The Indonesian Child Welfare Foundation)

(6) JICA 事業(インドネシア産業公害防止技術訓練計画プロジェクト)視察

- ・ JICA 事業がインドネシアでどのように活かされているか視察し、援助事業について理解を深める。

[訪問先]

- ・ 工業貿易省研究開発庁科学工業研究所

(7) 帰国青年との交流会、セミナー

- ・ KAPPIJA-21のメンバーと打ち解けた環境を築き、調査団の日程を円滑に遂行できるように協力を依頼する。
- ・ セミナーでは互いの国情の違いによる考え方の相違点について意見交換する。

(8) ホームステイ

- ・ インドネシアの一般家庭滞在を通じ、家族のあり方、価値観などに触れ、同国事情の、より正確な理解を図り、併せて異文化尊重に対する認識を深める。
- ・ ホームステイを体験することにより、訪日青年ホームステイプログラムの改善点、問題点を発見して、今後のプログラムの作成、改善に寄与する。

3. 調査団員

	氏名	所属先(青年招へい事業との関わり)	
リーダー	佐藤 正一 サトウ ショウイチ	・新潟県世界青年友の会会長 (分野別地方プログラム担当者)	'89 シンガポール(学生) '90 フィリピン(学生) '91 フィジー(公務員) '94 韓国(学生) '96 アフリカ仏語圏 (経済開発公務員)
メンバー	中村 彰夫 ナカムラ アキオ	・香川県海外派遣友の会副会長 (分野別地方プログラム担当者)	'95 中国(地域振興) '96,'97 インドネシア(農業)
メンバー	田代 雅一 タシロ マサカズ	・香川県海外派遣友の会副会長 (分野別地方プログラム担当者)	'95 中国(地域振興) '96,'97 インドネシア(農業)
メンバー	白川 春海 シラカワ ハルミ	・岐阜県世界青年友の会 ・PTP(People to people)岐阜 (ホストファミリー)	'95 フィリピン(教員) '96,'97 インド (教育・理数科教員)
メンバー	船戸 俊明 フナト トシアキ	・東京都世界青年友の会 (合宿セミナー参加者)	'96 インド (教育・理数科教員) '97 韓国(教員・小学校) '97 インドネシア(農業)

II. 調査結果

1. 日程

12月9日(火)

- 10:50 成田空港発(JL725 便)
- 16:50 ジャカルタ・スカルノ・ハッタ空港着
KAPPIJA メンバー数名の出迎えを受ける。
- 19:00 プレジデントホテルチェックイン
- 19:30 団員ミーティング

12月10日(水)

- 06:00 ホテル出発
- 07:00 教育現場視察(帰国青年活動現場、Labschool)
- 10:00 国際協力事業団(JICA) インドネシア事務所訪問
- 11:15 日本大使館表敬訪問
- 12:30 昼食
- 14:00 ジャカルタ市内視察
- 16:30 ホテル帰着
- 17:30 ホテル出発
- 18:00 教育現場視察(帰国青年活動現場、LIA 財団—英語特別教育校)
- 19:00 インドネシア帰国青年連絡組織(KAPPIJA-21)主催歓迎会出席
- 22:00 ホテル帰着

12月11日(木)

- 08:40 ホテル出発
- 10:00 特産品製作(バティック染色)工場視察(Iwan Tirta Co.)
- 11:00 教育現場視察(ジャカルタ市内公立小学校)
- 12:30 児童福祉施設視察(YKAI)
- 13:30 昼食
- 16:00 JICA プロジェクト活動現場視察(インドネシア産業公害防止技術訓練プロジェクト)
- 18:30 ホテル帰着
- 19:00 ホテル出発
- 19:30 ジャカルタ市内視察

21:00 ホテル帰着

12月12日(金)

08:00 ホテル出発

08:40 内閣官房表敬訪問

10:30 ジャカルタ郊外民族施設視察(Taman Mini Indonesia Indah)

12:30 昼食

14:00 帰国青年とのセミナー

16:30 ホテル帰着

19:00 ホテル出発

19:30 現地受け入れ委員との懇親会(Restaurant Ny. Suharti)

22:00 ホテル帰着

12月13日(土)

09:30 ホテルチェックアウト後ホームステイ先へ

12月14日(日)

07:00 ホームステイ先よりブンチャック(Puncak Pass)集合

08:00 同窓会メンバーのハイキングに合流

11:00 同窓会懇親会に参加

13:00 ブンチャック出発

16:00 ホテルチェックイン、帰国準備

19:00 帰国青年と懇談

20:30 ホテルチェックアウト、出発

21:30 スカルノ・ハッタ空港着

23:45 スカルノ・ハッタ空港発(JL726便)

12月15日(月)

08:35 成田空港着、通関後解散

2. 主要面談者

(1) JICA インドネシア事務所

諏訪 龍 所長
大田 亮 職員(青年招へい担当)

(2) 日本大使館

樋田 幸浩 二等書記官

(3) 内閣官房

Mr. Adik Bantarso Bandoro

Head, Division of Asean and TCDC Programmes

Bureau for Technical Cooperation

Ms. Rika Kiswardani (1995年 アセアン混成社会福祉)

Ms. Sri Wahyu Utami (1996年 教育)

(4) インドネシア帰国青年同窓会組織 (KAPPIJA-21)

Ms. Frita Diah Paramitawati (1996年 教育、受け入れ委員)

Mr. Mohamad Al-Arief (1996年 教育、受け入れ委員)

Mr. Bangun Supriyanto (1994年 経済、受け入れ委員)

Ms. Endah Puspitasari (1994年 アセアン混成経済、受け入れ委員)

Mr. Nasiruddin Munawir (1997年 アセアン混成教育)

Mr. Chandra Rudyanto (1997年 アセアン混成環境)

Ms. Widi Hadiati (1997年 農業)

Mr. ASRA (1997年 アセアン混成教育)

Ms. Ade Ivana (1997年 農業)

Ms. Rika Navida Janis (1997年 農業)

(5) JICA 大気汚染防止プロジェクト活動現場

牧田 康之(長期派遣専門家)

工業省研究開発庁化学工業研究所

(6) 教育現場視察

Labschool (Sekolah Yayasan Pembina IKIP Jakarta)

Prof. Dr. Koesno Sastromihardjo, M. P. (副理事長)

Drs. H. Arief Rachman, M.P.	(高等学校長)
Drs. Hj. Ulya Latifah	(高等学校副校長)
Drs. M. Fachruddin	(高等学校副校長)
Drs. Taryitno	(中学校副校長)

(7) インドネシア児童福祉財団 [YKAI (Yayasan Kesejahteraan Arak Indonesia)]

Ms. Winarti	Program Manager
Mr. Totok Hartono	Social Worker (House-Stay Coordinator)

(8) 現地通訳

林 豊 インドネシア大学学生 (留学中)

3. 調査結果概要

今回の私たちの調査を遂行するに当たり、そのプログラムアレンジを全て行ってくれた同窓会組織KAPPIJA-21のメンバーたちと意見交換をし、招へい事業に対する相互理解を図った。また、帰国青年の職場訪問(教育施設)での視察を通して日本での研修成果をどの様に活かし、それに対する周囲の評価がどの様なものであるのか現地調査を行った。

その他の視察、ホームステイ等のインドネシア実情把握も含め、今回のインドネシア訪問は今後のプログラムの作成、改善に役立つものとなった。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換聴取内容

イ. JICA インドネシア事務所

今回の滞在先であるプレジデントホテルのすぐ隣にあった。簡単な自己紹介の後、諏訪所長よりJICAの招へい事業、インドネシアと日本との関係についての説明を受けた。説明は以下の通りである。

現在、KAPPIJAのメンバーは何かをやりたいということで、スポンサーを見つけたり、無料の事務所を借りてきたりして一所懸命活動をやっている。

彼らは、このプログラムを通して日本に相当の思いを持っている。我々JICAとしては、それらの気持ちを大切に見守っていきたいと思っている。

21世紀にインドネシアと日本が対等のパートナーとしてやっていくのなら日本はもっとインドネシアのことについて学ばなければならない。歴史的、経済的にももっとインドネシアにおける日本を考えていかなければならない時期なのではないだろうか。

今回のアジア通貨危機を通してみれば、アジアの国々は不可分であり、世界もまた同様であると言えるのではないだろうか。このような世界の中で我々は、世界の常識を考えていかなければならない。

このプログラムはそのような考えの青年を育てていくという意味で、単にJICAのプログラムではなく、日本の未来のためのプログラムといえるだろう。

インドネシアの青年とつき合うときに忘れてはならないのがオランダによる植民地化と日本軍の侵攻という歴史である。日本軍が攻めたときは、インドネシア、日本とも各々に思惑を持ちつつ、共にオランダに対抗していた。これは現在インドネシアと日本が一緒に何かをやっていく上で、良い方に影響を与えている。

現在、インドネシアと日本の関係はとても親密であり、JICAのプログラムの中でもインドネシアとの関係が一番長いつき合いとなっている。

経済的にみると、今のインドネシアのGNPは1千ドルを超えている。マラッカ海峡の安全な航行やニューヨークに次いで2番目というジャカルタにおけるガス・石炭の輸入や商社の取扱量を考えれば、日本はこれからもインドネシアを支援していくという姿勢を保っていかなければいけない。これからインドネシアが発展していくためには、ここでもう少し援助を必要としている。今年日本は、ODAを下げなければいけなかったのに、下げなかった。このことで大統領には大変感謝された。

このように様々な観点から考え、やはりインドネシアへの支援を続けることにより両国の友好関係を保っていかなければならないと思う。

次に政治についてだが、スハルト大統領になってから、開発と家族主義の二つを掲げて統治を進めてきた。

家族主義について例を挙げると、大統領は国民みんなの世話をみると考え、企業に利益の2%を寄付させてそれを恵まれない環境の人々を助けるために使っている。インドネシアは独立して50年。まだ若い国であるので、我々は大きな目でこれからの発展を見守っていかなければならないと思う。

ロ、インドネシア日本大使館

JICA事務所に引き続き訪問した。

当日対応いただいたのは樋田二等書記官であった。おのおの自己紹介の後、この事業についてとインドネシアの状況等について以下の説明を受けた。

昨年のアフターケアチームとKAPPIJAのメンバーのパーティーに出席した際、KAPPIJAのメンバーが言うには、日本でプログラムの中ではホームステイを含む地方プログラムが一番良かったという話をたくさん聞いた。やはり日本の家庭にホームステイをするということは、彼らに多大な影響を与えているようである。

ジャカルタの中心はとても近代化された街だが一歩郊外に出ると、街頭テレビに群がる人々、屋台でたむろしている人々等、全く違ったインドネシアが見えてくる。

今、インドネシアは揺れている。スハルト大統領の病状懸念とインドネシア銀行の火事が重なり、インドネシア経済の先行き不安を招いた。輸入材が値上がりし、それにもなって他のものの値段が上がるだろう。さらに、干ばつで食料品の値段も上がってきている。今現在は何とか平穏だが、今後は大変不安である。

日本からのODAは1位であり、日本はインドネシアへの協力に大変力を入れていてJICAの事務所は世界最大の規模である。NGOについても外務省の外郭団体のプログラム等インドネシアを支援するプログラムがたくさんあり、人と人とのつき合いを大切にしている。いろいろな面からインドネシアと日本のつき合いを深めていこうとしている。

例えば、植林、啓発、啓蒙によりマングローブを守る環境保護活動や、声の出ない人への発声練習を行う医療、診療技術指導等がある。インドネシアでは保健の技術が全般的に進んでいない。OISCAやAMDAも拠点を置こうと事務所の場所を探している。

今までインドネシア政府はボランティアを受け入れていなかった。しかし最近、インドネシア政府もボランティアの必要性を認識してその受け入れを進めている。

親日家も増えてきている。日本の科学技術庁にあたる官庁では日本への留学者が多い。政府も日本や他のアジア諸国への留学を若者に勧めており、この事は近隣諸国と人の行き来を活発にしている。JICA事業もまた、親日家が増えている理由の一つにあげられるであろう。今後もこの事業を通してインドネシアと日本の友好関係がさらに良いものになるようにみなさんにもがんばっていただきたい。

ハ、インドネシア共和国内閣官房

Mr. Adik B. Bantarso他2名より、招へい青年選考方法の聴取および招へい事業に関する意見交換等をインドネシア共和国内閣官房会議室で行った。

① 青年の選考方法およびその基準について

インドネシアからの150名前後の招へい青年の選考は、事務局より各州政府経由で募集を開始する。出身地域および分野を全国に分散するよう配慮し、その際、宗教、民族による区別は行わないようにする。事務局に推せんされる候補者は毎回約600名程度になり、その後定員の150名に絞られる。その基準として特に重視していることを以下に示す。

- ・ 社会・社会活動に関わっている人
- ・ 訪日の目的がはっきりとしている人

・英語でのコミュニケーションを大切にしている人

② 同窓会組織に対する要望

青年の帰国後、ジャカルタでのKAPPIJA-21の様な活動を全国に広げ、その支援を政府レベルで行えるよう、要請したのに対し「KAPPIJA-21は、政府応援活動の一つであり、彼らが21世紀に向けて友情を深めていくこと、そして彼らの活動がより高まることを期待している。」と語った。

(2) 帰国青年活動現場、その他訪問場所について

イ. Labschool

この学校は、96年教育グループで来日した、フリタさんとマスラさんの勤める学校である。フリタさんは英語を、アスラさんは宗教を教えている。朝の7時前に学校に到着し、我々を出迎えてくれたのは、校長の Mr. Arif Rachaman と教務の先生、生徒会長のアマル君他3名の生徒、そして、日本から留学している斎藤君達であった。我々は、校長室に案内されこの学校の簡単な説明を受けた。それによると、同校は、幼稚園、小学校、中学校、高校が一つの敷地のなかにある私立の総合学校であった。そのあと、ガムランというインドネシアの伝統音楽を演奏している教室や、レゴンダランというバリの踊りを踊る音楽室を見学した。また、LL教室やコンピューター教室、ランチルーム、運動場などの学校施設を見学した。

一通りの見学が終わったあと図書室において、この学校の教師・生徒・私たちの三者でディスカッションを行った。学校は、小学校から高校まで一貫教育が行われている。中学校から高校に進学するときに試験があるが、ほとんどの生徒は、高校まで進むそうである。また、高校を卒業した生徒の95%が大学に進学するそうである。中には国立や軍の有名大学に進学する者もいるそうである。JICAの発行しているASEAN交流手帳によると、インドネシアの大学進学率は9%であるから、この学校が相当レベルの高い学校であることがわかる。生徒たちに将来どんな職業に就きたいかという質問をしたところ、エンジニアや公務員になりたいという返事だった。

学校生活は、日本の学校とあまり変わりがないようである。生徒会長は生徒の選挙で決め、クラブ活動も何種類かあるようだ。また、長期休暇中には、キャンプや川下りなどの野外活動のプログラムも用意されている。宿題も日本ほど多くはないがあり、各自がきちんとしてくるそうである。入学試験の厳しさについて詳しく聞きたかったが、時間があまりなかったために聞けなかった。

ただ、日本の学校と違うところは、イスラム教の勉強の時間が必修となっており、イスラム教の倫理観が行き届いているということである。各教室には、スハルト大統領

領の写真が飾られており、多くの人が尊敬しているようである。

生徒たちは、明るくはきはきとしている。授業中も熱心で、集中して先生の話の聞いている。先生方も非常に熱心に教えている様子が感じ取られた。「自分たちがこの国をよくしていこう。」という意気込みが伝わってきて、とてもよい印象を受けた。

ロ. LIA 財団

帰国青年 Ms. Frita Diahparamitawati と Mr. Monamad Al-Arief が勤める LIA 財団を見学するため、この施設を訪れた。ここでは Mr. Monamad Al-Arief の付き添いでこの財団の経営する英語会話スクールの説明を受けながら施設を見学した。それによると、この施設は8階建になっている。1階はレセプションホールとして使われており、2階から8階までがスクールとして使われている。2階から5階までの全フロアが教室となっており、6、7階は図書室、そして8階は教員室になっていた。ここの生徒は中学生、高校生が中心であり、100名以上の生徒がいた。しかし授業料はインドネシアの一般家庭にとっては非常に高額であり、良家の子弟が多いようにも感じた。

最も大きい教室(約30名以上収容可能)では文法に関する授業をしており、生徒と教師の比率は20～30対1の割合であった。そのような比較的大規模の教室が各フロアに1室以上設けられており、10～20名規模の教室が各フロアに4～5室設けられていた。図書室(6階)には本や雑誌が数多く納められており、本棚(4段のものから、高いものでは8段以上のものまであった)が、フロア面積の約半数を占めている。また、備えつけのテーブルでは、学生が熱心に本を読んでいた。7階には主に留学に関する資料が陳列されていた。6階と同様、本棚の書物は多かった。8階の教員室では、一つの部屋に約20名ほどの教師がいて、学生が積極的に教師に質問をしていた。

生徒たちが、教師に積極的に質問をする姿が強く印象に残っている。インドネシアの学生は、日本の学生と比較すると授業に対し非常に積極的な態度で臨んでいた。この様子を見て、インドネシアの学生たちの半数以上が英語を流暢に話せる理由がわかったような気がした。

ハ. Iwan Tirta Company

Iwan Tirta という Batik (バティック) を作っている工場の見学をした。バティックとは、インドネシアの伝統的なろうけつ染めである。完成した布は、スカーフにしたり服にしたりして使用している。バティックは、国内ではもちろんのこと海外でも高い評価を受けているそうである。

バティックの製作は、次のようにしておこなわれる。まず、元になるデザインを布に鉛筆で写していく。細かいデザインが多く神経を使う作業である。次に、鉛筆で下

書きをした一定の部分だけに蠟を塗っていく。蠟を塗るのは、パイプのような道具で一つ一つに塗っていく。この過程がもっとも技術を必要とし根気のいる仕事である。工場の中では、20人ぐらいの人が蠟を塗る作業をしていた。この工場の責任者の話によると、この工場では、中部ジャワから腕のいい職人に来てもらっているそうである。蠟塗りが終わると次は色付けである。これも専門の職人が行う。蠟を塗っていない所だけが色が付くのである。そして布を乾かし色の数だけこの作業を繰り返す。すべて手作業であるため、1日最大で5枚程度しか作れないそうである。この工場で働いている人は、手作りということを誇りにしているようであった。自分たちがインドネシアの伝統工芸を受け継ぎ、次の時代に伝えていくという使命感のようなものさえ感じられた。生産性の向上やコストの削減も大事だが、手作りの良さをもっともっと大切にしていかなければならないと思った。

その後我々は、完成品を販売しているIwan Tirtaという店に行き、素晴らしい完成品を見た。この工場で作られたパティックは、スハルト大統領も身につけているそうである。また、欧米にも多く輸出しており、高い評価を受けているそうである。質の高い物は、誰もがその価値を認めるものであると感じた。

二. YKAI 訪問

YKAI (Yayasan Kesejahteraan Anak Indonesia) は、国立の児童福祉財団でストリートチルドレンのための収容施設である。

ジャカルタの街には、あちこちにストリートチルドレンの姿が見られる。彼らは、路上で物を売ったり、バスの中で音楽を演奏したりして、その日暮らしをしているそうである。彼らのほとんどは、家庭が貧しく家にも生活することが出来ないために、都会に出てきているのである。当然住む家もなく、仕事がなければ食べるものもない。

そうした子供たちを何とかしなければならぬというスハルト大統領の呼びかけでこのような施設ができたそうである。施設といっても空き家を1軒借りているだけだが。その施設には、2人のソーシャルワーカーがおり、子どもたちに勉強を教えたり、一緒に遊んだりして面倒をみている。この施設への出入りは自由で、お金がなくなり泊まる場所がなくなったらこの施設に来るようである。この施設は、最大20人ぐらいを受け入れることができ、現在10人程度が暮らしているそうである。

この施設にいる子供2人に歌と太鼓の演奏を聞かせてもらった。大変上手なのに驚いた。また彼らは、非常にたくましく明るかった。私の基準で考えると、彼らはかわいそうだと思うのだが、彼ら自身はそうは思っていない。今自分が生活できていることに幸せを感じているのかもしれない。この子どもたちに、将来も幸せだと感じさせ

るのは、大人の責任であると思う。

(3) 交流会・セミナー

イ. 歓迎夕食会

滞在2日目夕方、ジャカルタ市内見学後LIA財団のホールへ移動、KAPPIJA主催の歓迎夕食会に出席した。首都近郊に住む帰国青年約30名が我々を歓迎するために集結した。

パーティーは幻想的なガムランの演奏で始まり、バリ・スマトラに古くから伝わる歌や踊りへと続いた。日本側の出し物としては、福笑いを行い、大いに盛り上がった。ホストファミリーとの対面もこの時行われ、我々の不安を取り除いてくれた。同窓会メンバーによる手作りパーティーは、終始和やかな雰囲気を保ち約2時間30分行われた。以下プログラムを列記する。

プログラム

- ・ 開会式(ガムラン演奏)
- ・ 開会宣言(Mr. Mohamad Al-Arief, ホームステイプログラム担当者)
- ・ KAPPIJA 代表者挨拶(Ms. Frita D. Paramitawati)
- ・ JICA 挨拶(大田氏)
- ・ 派遣団リーダー挨拶(佐藤)
- ・ ホストファミリー対面式
- ・ 出し物

ガムラン演奏、ダンス(バリ、スマトラ)、福笑い

ロ. セミナー

出席者：調査団(佐藤正一、中村彰夫、田代雅一、白川春海、船戸俊明)

青年 Ms. Frita D. Paramitawati, Mr. Nasiruddin Munawir, Mr. ASRA,
Mr. Chandra Rudyanto, Ms. Widi Hadiati, 他1名計6名

滞在4日目(12月12日)の午後帰国青年6名とセミナー(意見交換会)を行った。テーマは2つに絞り、「日本とインドネシアの青年活動の比較」及び「女性の社会的地位と社会進出」について話し合った。

最初のテーマについて、まず帰国青年側が、「日本の若者は常に忙しそうだ。それに対し、インドネシア人はのんびりとした雰囲気がある。」と口火を切った。いろいろと双方で具体例をあげたり意見を交わした後、両国の共通認識として、「国によって生活習慣や事情が異なるので、性格の違いがでるのは当然のことである。自分の国を

他の国と比較するだけでなく、相違点を把握することが大切であり、それが相互理解につながる。このセミナーもそうした相互理解の第一歩になる。今後もできるだけ交流を継続していこう。」といった意見にまとまった。

後のテーマについては、まず、日本の低出産率の要因の紹介から始まり、産休や育休制度、家庭における夫の役割(平たく言えば男性が家事分担をこなすこと)において両国の違いを痛感した。わが国では女性が結婚、出産後に仕事の継続を希望したとしても核家族化や社会保障制度がまだまだ不十分であり諦めざるをえないことが多い。日本と比較してみると、インドネシアの方が女性にとって継続した社会参加が可能である。女性が職場において役職につくことも希ではないようだ。この背景には、家事、子育てを親や安い賃金で雇えるメイドに託していることと、家庭においては夫が家事を分担して手伝うのが当然のこととして捉えられていることがあげられる。

帰国青年は日本で生活体験があるため、両国を比較してとても分かりやすく我々にインドネシア事情を説明してくれた。お互い、相手国事情を理解するためにはふさわしいセミナーであった。

ハ、交流会

滞在最終日、それぞれのホストファミリーと共にブンチャック峠(ボゴール南東35km)へ行った。この日、ここでは帰国青年30名と交流ハイキングが予定されていた。KAPPIJAは最近役員改選を行い、我々調査団受入れは同窓会にとって初めての大きな行事で、歓迎夕食会に続くハイキングは大切なイベントであったようだ。

ハイキングは5人1組でチームを作り、約6kmのハイキングコースを歩いた。連日のハードスケジュールとホームステイ終了後で体力が消耗しきっている時のハイキングで正直言うと非常に気が重かった。しかし、途中青年とおしゃべりを楽しんだり、自然を満喫したりととても楽しい一日を過ごすことが出来た。終了後は記念品の抽選会と昼食時間でグループ以外の青年との交流も図れた。途中雨に見舞われたが、青年との別れを惜しみつつ和やかな雰囲気のまま交流会を終え、ジャカルタへの帰路についた。

(4) ホームステイ

団員のホームステイ先は以下の通りである。インドネシアの実情を理解するにふさわしい体験であった。この経験は、青年招へい事業受入れの際行うホームステイ家庭への説明会において大いに役立つと確信している。ホームステイ家庭への指導が受ける側と受けられる側の両面から出来るようになったと考える。

氏名	ホスト氏名	ホスト職業 参加年度 家族構成
佐藤 正一	Ms. Frita D. Paramita Wati	中学校教師 '96 教員グループ 夫・本人・娘
中村 彰夫	Ms. Edhi	主婦 '97 農業グループ 母・父・本人・妹夫婦・子供二人
田代 雅一	Mr. Heri Sokoco	公務員 '96 教員グループ 本人
白川 春海	Mr. Bangun Supriyanto	無職 '94 経済グループ 父・母・姉・本人
船戸 俊明	Ms. Endah Puspitasari	銀行員 '94 アセアン混成(経済) 母・兄・弟・本人・妹

(5) JICA 事業視察

JICA事業視察としてプロジェクト方式技術協力現場であるジャカルタ市郊外(ジャカルタ市東ジャカルタパサルルポ プカヨン)にある工業開発庁を訪れた。牧田康之専門家と面会し、現地活動についての説明を受け、その後施設見学をした。ここでは現在、環境問題対策をインドネシア共和国工業省と共に取り組んでいる。そして近い将来、この事業を工業省の管轄下にすることを目標としている。次に、ここでの聴取内容を以下に記す。

イ. プロジェクト名称

インドネシア産業公害防止技術訓練計画(The Project on Training in Industrial Pollution Prevention Technology : TIPPT)

ロ. プロジェクトの協力期間

1993年10月8日～1998年10月7日(5年間)

ハ. プロジェクトの目的および目標

産業公害防止に係わる技術協力および行政能力を向上させることを目的とし、インドネシア国内の産業公害を改善することを目標とする。

ニ. プロジェクトの実施機関

インドネシア共和国工業省工業研究開発庁(Agency for Industrial Research and Development, Ministry of Industry)

ホ. 協力分野・活動計画

① 技術移転分野

同プロジェクトは、インドネシアに対し公害防止に係わる以下の四つの分野についての技術移転を行う。

- ・ 水質汚濁防止技術
- ・ 大気汚染防止技術
- ・ 産業廃棄物処理技術
- ・ 産業公害防止行政制度

② 技術移転の内容

次の活動によってインドネシア側の技師に産業公害防止に係わる技術移転を行う。

- a. 日本の公害防止に係わる技術、法規制等を紹介することにより技術移転を受けた者が公害防止に必要な技術や法制度のインドネシアへの応用ができるよう指導する。
- b. 主に日本における実例の紹介をすることにより、主要な公害防止技術に関する知識を習得させると共に公害防止実習装置による実習により、処理技術を習得させる。
- c. 工場の実態調査により、実情の理解と工業の公害問題の実態を把握させる。
- d. 排水や廃棄物のサンプル分析を通して、分析技術を習得させる。
- e. プロセス解析やプロセス改善を実際の工場をモデルに実習し、公害防止技術の適用方法を習得させる。
- f. 先進工場での実習により、公害防止装置の運転方法や保守管理方法を習得させる。
- g. 日本や近隣諸国の公害防止規制の紹介や工場調査の結果を踏まえ、国内の産業公害防止のために必要な政策を検討する。
- h. セミナーの開催により、公害防止技術の啓蒙活動を行う。

ヘ. 専門家派遣

① 専門家の派遣内容

- a. 牧田氏を含め、現在下記5名の専門家が派遣されている。

チーフアドバイザー	大内 日出夫	(産業公害防止行政・制度)
調整員	和泉 守	(業務調整)
水質汚濁防止専門家	久新 正三郎	(水質汚濁防止技術全般)

大気汚染防止専門家 牧田 康之 (大気汚染防止技術全般)
産業廃棄物処理専門家 藤村 和夫 (産業廃棄物処理技術全般)

b. 短期専門家(年間3～5名)

特定の技術分野について、必要に応じ毎年数名が派遣されている。

ト. 研修員受入

国内カウンターパートを毎年3名程度研修員として日本に受け入れ、講義や施設見学を通じて、実際の日本の産業防止公害対策を指導する。内容は次の項目を予定している。

- ・ 産業公害の歴史
- ・ 公害防止の現状(法制度、公害防止管理組織)
- ・ 産業公害防止技術等

チ. 同プロジェクトの供与機材は、以下に示す各分野の実習装置および共通分析機器、教育用機材で構成されている。

- ・ 排ガス処理実習装置
- ・ 水処理実習装置
- ・ 廃棄物処理実習装置
- ・ 分析機器
- ・ 教育用視聴覚機材

以上の説明を受けた後、牧野氏より苦勞することや今後の抱負についてうかがった。「私たちが行っている環境改善のためのプロジェクトは大量生産、大量消費時代にある今のインドネシアではまだ重要視されていないのが現状であり、環境関連事業で指導的立場にある担当者の中にもこういった問題に無関心な者がいる。残念ながら、そのような者は我々の技術を積極的には理解しようとしていない。わが国の戦後の高度経済成長時代にも様々な公害問題が発生していたことを思い出すと、無理のないことかもしれない。しかし、我々の派遣期間、つまりプロジェクトの期間は限られており、少しでも多くの事を彼らに吸収してもらいたいと考えるため、つつい焦ってしまう。また、彼らの生活習慣も考慮してプログラムを組まなければならない。というのは、イスラム教の教えにより金曜日が安息日のため、一週間の稼働日は実質月曜から木曜までの4日間であること、勤務時間中にも定刻に礼拝を行うような宗教を中心とした生活であることがどうしても支障となっている。日本人は仕事を第一に考えるため、インドネシアに初めて来た時は彼らの事が理解できなかった。今では、彼らの生活習慣を認め、技術指導も

この国にあった方法で行うように心がけている。今後の課題は、我々の派遣期間が終わっても現地に残る彼らが我々に頼る事なく伝授した設備の使い方や知識を有効に活用し、インドネシアの環境改善に取り組めるような体制を作ることにある。あたたかく彼らを見守って行きたい。」と熱をこめて話された。

今後も青年招へい事業に携わっていく我々にとって、JICAの主たる事業を視察出来たことは何にもかえがたい体験であった。JICAを違った視点からみることが出来た。調査団一同、わが国のODA事業がどのような規模でどう行われているか常々興味をもっており、このような機会を得られたことにたいへん感謝している。現場で日々苦勞されている皆さんの活躍が近い将来、良い結果として実が結ばれるよう、期待している。

5. 所感及び提言

(1) 調査団所感

暖冬とはいっても冬の日本と常夏のインドネシアでは気温差が20℃もあり、団員一同、着ていく洋服の選択に苦勞したことからこの旅行は始まった。今回の調査チームのメンバーはインドネシアへの訪問が全員初めてであり、それまでのインドネシアに関するニュースといえば、煙害による呼吸器障害と飛行機事故であった。滞在日数は5泊6日と短い期間であったが、今回の調査目的を達するためには十分な日程が組まれていた。

インドネシアではジャカルタだけに滞在し、市内をバスで移動したが交通渋滞による移動時間の長さには閉口せざるを得なかった。しかし、日程はよく考えられており、途中のバスの中で各訪問先について細かな説明があり、さらに飲料水の補給を適時してくれるなど、帰国青年達の親切な対応に団員すべてが感激して、不満は出てこなかった。

調査施設のほかインドネシアの独立記念シンボルタワー(Monas)、各島ごとの伝統的な家屋や文化を展示したジャカルタ民族施設(TMII)、またそこに併設されているモスク、教会、シバ神の寺院などを見学して、複雑なインドネシアの国情を垣間見た気がした。インドネシアは東西5千キロにまたがる1万3千あまりの島からなる国で、島ごとに言語が異なり、文化も異なっている。また、宗教も国民の90%がイスラム教徒であるが、ヒンズー教徒、キリスト教徒などもいて幅広い。多民族、多宗教で広い国土を統一していくためには、共通の意志を持つためのシンボルが必要であり、さらに各民族や宗教に平等に接するため、公園では寺院などが平等に配置されていた。政府の配慮が感じとられた。

今回われわれ調査団をコーディネートしてくれた青年達はいずれも勤勉で英語を自在に使いこなし、極めてスマートであった。これからのインドネシアは彼らが支えていくのだと思うと頼もしく感じたものであった。しかし一方で、窓の外を眺めると車の中を

縫うようにして歩くストリートチルドレンがおり、河川にはゴミが散乱し、悪臭がたちこめていた。経済や環境問題も多くかかえていると感じられた。たまたま我々がインドネシアを訪問していた時期は、京都で地球温暖化国際会議が開催され、インドネシアルピアが大幅な下落をしている時期でもあった。インドネシアの経済や環境が、決してインドネシアだけではすまされない問題となっており、日本に与える影響も大きくなってきている。JICAプロジェクトによる援助協力がどのようにインドネシアで活用され、支援の一助となっているのか、私達日本人はもっと理解しなければならないという気持ちになった。

今回、調査団に参加したことで、インドネシアに対しての興味が膨らみ、帰国青年達との交流にも力が入ると思う。そして、青年招へい事業への認識を新たにし、今後の受入活動に今回の経験で得た知識や体験を反映させるよう努力していきたい。

(2) 団員所感

イ. 佐藤正一「アフターケア事業と地方プログラム」

今回アフターケア事業で初めてインドネシアという国に触れることができた。JICA 青年招へい事業には10年近く地方プログラムで携わってきたが、これまでは残念ながらインドネシアを受け入れたことはなく、十分な知識を持っていなかった。しかし、今回の経験でインドネシアの抱えている問題や日本との関わり、青年達の帰国後の様子などを短い期間ではあったが、いくらか理解することができたと満足している。また、受け入れされる立場となって初めてプログラムに対する要望やホームステイの不安なども理解できた。

今回のプログラムはKAPPIJA-21のメンバーが何回となく打ち合わせをし、ジャカルタの交通事情などを考慮しながら作成した労作であった。空港に到着すると数名のメンバーが出迎え、ホテルに行くまでのバスの中でプログラム説明を行った。手際よく資料が配布され、インドネシアの家庭事情や各訪問先の説明まで入った丁寧なものであった。また、随行する青年達は朝5時半にホテルに集合しロビーで我々を待っていてくれた。青年達は4時半ころから家を出てきているのである。我々を心から歓待して出迎えてくれている青年達の熱意とやさしさに感激したものであった。

しかし、非常に厳しいスケジュールで、朝6時から移動が始まり、午前中だけで3ヶ所も訪問するような日程で埋められていた。得てして我々日本の地方プログラムでもよくあることだが、地方の特産品を作っている工場や文化伝統のある施設などの訪問で目一杯にスケジュールを詰め込んでしまう。特に学校などは施設内見学するだけでけっこうな距離を歩く。これでは折角苦勞して訪問先に依頼し、スケジュールに入れても十分な効果が得られない。日本に来たのだから日本の時間に合わせた行動を招へ

い青年に望んだこともあったが、これは受け入れサイドの傲慢であった。少なくとも午前中施設見学で歩いたら、午後はセミナーや異文化体験などで移動があまりないような青年達の体調を考えたプログラムを考えていかねばならない。今回逆の立場で体験することになり、疲れてくると集中力がなくなり、伝えられたことの半分も頭に入らなくなってしまうことがわかった。ただ、KAPPIIAメンバーのスケジュールはジャカルタの交通事情を考えてのものであり、ラッシュアワーでは本当に車が動かない。ジャカルタ市内では予定の行動ができず、プログラムが全くたたなくなるという事情も後でわかったのだが。

さて、ホームステイ体験も初めてであった。ホテルは快適で気苦労はないが、異文化を体験する機会がほとんどない。それに対し一般家庭での生活はたとえ一泊と短くても文化や風土に触れるには十分であった。たまたま一晚蚊に悩まされて眠れなかったが、家族との会話や食事などで楽しい時間を過ごし、忘れられない体験となった。ただし、今回のホームステイを通じて思ったことは、ステイ先の家族構成や写真などの情報を与えてもらうとやはり安心する。今回は最初に配布された資料や歓迎会で顔合わせを行っていたので不安というものはなかった。私の企画している地方プログラムでは、東京での開講式に地方担当者も出席し、参加青年達をビデオにとってホストファミリー説明会で見せたり、その後の合宿セミナーでホストファミリーの家族写真やメッセージを青年達に渡すようにしていた。これらの情報提供がとても大切であったのだと改めて痛感した。

このほかこれまでも意識していたが、さらに再認識したこととして、プログラムを運営する人やホストファミリーの対応によってその国の印象が固定化されてしまうことである。今回の青年達は青年招へい事業に参加した人達であるから、当然ながら日本に興味をもっており、片言の日本語であっても話そうと心がけてくれた。またとても好意的な対応に心から感謝して帰ってきた。インドネシアを訪問しても知っているインドネシア人は彼らだけである。ということは、彼らの印象がそのままインドネシア人の印象になる。このことは、反面、日本で受け入れたときの我々やホストファミリーの対応によっても同じことがいえる。横柄な態度をとる人が一人でもいたなら日本人に対する印象は悪くなるだろうし、帰国してからのKAPPIIAのような活動も参加しなくなるだろう。受入団体のメンバーには十分この点を認識してもらわなくてはならないし、ホストファミリーの選択でも事前の打ち合わせなどで説明していく必要がある。

以上のように、地方プログラムを行うにあたって、注意しなくてはいけないことや異文化体験することによって味わう感激など改めて確認できたことはたいへん良い経験であったと思う。これらの機会を与えていただいた関係者の皆さん及びアフターケ

アチームの受け入れのために努力いただいたKAPPIJAのメンバーに感謝の意を表したい。

ロ. 中村 彰夫 「あたたかい心のかようプログラム」

私が国際交流を始めるきっかけになったのは、1991年に香川県が主催している「青年の翼」という事業に参加したことからである。この「青年の翼」という事業は、香川県の青年がマレーシア、シンガポール、オーストラリアに行き、現地の青年との交流やホームステイを通して国際理解を深めようというものである。特に、ホームステイは、初めての体験であり強く印象に残った。

帰国した後、同じ事業に参加した者で作っている「香川県海外派遣友の会」に理事として加わり、外国から香川県を訪れる青年たちの受け入れのお手伝いをさせてもらってきた。特に、96年・97年は「青年招へい事業」で来県したインドネシア青年を受け入れ、県内でのプログラムの立案・実施を行った。また、ホストファミリーの一人にもなった。

このような経験をもとに「アフターケアチーム」の一員として、インドネシアを訪れる機会を得たことは、非常にうれしく、かつ大きな期待があった。特にインドネシアの青年たちが、どのように私達を受け入れてくれるのかというところに興味があった。

我々が外国青年を受け入れるとき、計画・実施・評価の3つの段階に分けて考える。そこで、今回のインドネシア青年の受け入れプログラムを、この3つの観点に分けて考えてみようと思う。

まずは、計画の段階である。インドネシアでは「KAPPIJA」というJICAのプログラムで日本を訪問した青年たちの事後活動組織がある。中心メンバーは10人程度でほとんどが30才前後の若い人で、非常に活動的であった。

事後活動は、ややもすると消極的になりかなり強い目的意識がないと名ばかりのものになってしまう恐れがある。また、活動意欲があっても、資金や拠点がないと活動は思うようにできない。聞くところによると、KAPPIJAでは、JICAの施設の一部を会議場所に借りたり、自分らでスポンサーをみつけて活動資金を捻出しているようであった。このように、受け入れ組織がしっかりしているということは、受け入れを成功させるうえでとても重要なことではないかと思う。

そして、Ms. FURITAという今回のプログラムの実施責任者が、常に我々をサポートしてくれる態勢にあったこともプログラムを成功させる大きな要因であったと思う。また、団員一人一人に日程や訪問先の説明資料などの入ったファイルを準備してくれていた。そのファイルを見ると、日程や訪問先は入念に計画されていることがわ

かった。

次に実施である。移動にはバスを使っていたために、十分なスペースがあり、しかも同行の人ともコミュニケーションをとりながら移動することができた。バスには常にFURITAさんが乗り込み、他にKAPPIJAのメンバー数名が同行してくれた。訪問する施設の概要や説明なども、事前にバスの中で十分にあったこともうれしかった。

もし、数台の車に分乗するようなことになれば、時間的なロスも多くなり研修の効果もあまり上げられなかったのではないかと思う。しかし、バスが便利なのはわかっていても、中型バスを1週間チャーターすることは相当な苦勞があったものと思われる。また、KAPPIJAのメンバーと我々の会話は、主に英語で行われるのであるが、英語がそれほど得意でない自分にとって、通訳の林君(日本人留学生)が同行してくれたことは、非常にありがたかった。特に、細かい部分での意思の伝達であるとか、訪問先での質問などには、通訳は欠かせないと思った。今回のように、5人に1人ぐらい通訳が付けば、来日した外国青年も気が楽ではないかと思う。バスの中では、飲み物や食べ物を毎日準備してくれたり、観光案内やおみやげの説明もしてくれ細かいところへの配慮もされていた。

それに、忘れてならないのは、同行してくれるKAPPIJAのメンバーはそれぞれに自分の仕事を持っているということである。仕事の種類にもよると思うが、何日も休みを取るということは簡単にできることではないと思う。また、家族の理解があるからこそできるのではないだろうか。

そして、KAPPIJAのメンバーは、よく打合せをしていた。それはホテルのロビーとかバスの中などである。計画は、状況により変えていく必要がある。計画を変えていく柔軟性がなければ、その計画はよい計画とは言えない。その点、今回のプログラムでは、うまく打合わせが行われ臨機応変にプログラムの変更が行われていた。

最後に評価についてである。まず驚いたことは、帰国して2日目の夜にFURITAさんから国際電話があったということである。その内容は、「インドネシアに来てくれてありがとう。また会える日を楽しみにしている。」というものであった。他の団員にも同じような電話があったそうである。すごい行動力だと感心した。また、KAPPIJAのメンバーは行く先々で、写真やビデオを撮っていた。このように記録に残せば、後でプログラムの評価を行うときに客観性を持たせることができ、思い出にもなる。たぶん、写真やビデオを見ながら今回のプログラムの反省会が行われるものと思う。

以上のように、今回のプログラムを3つの観点から考えてみた。どの観点から考えても十分満足できるプログラムであったように思われる。そして、これらのプログラムの根底に流れているものは、「心のあたたかさ」ではないだろうか。仕事で機械的に

行うのでもなく、しかたがないから行うのでもない。日本から来た我々をあたたかい気持ちで迎えてくれ、あたたかい気持ちで見送ってくれた。そういうKAPPIJAのメンバーがいたからこそ、今回のプログラムに満足できたのだと思う。

外国の青年を受け入れるとき、「心のあたたかさ」のないプログラムは外国の青年の心に届かないだろうと思った。来年からも私は、外国の青年を受け入れるだろうと思う。今回のインドネシアの訪問で感じた「あたたかい心のかようプログラム」を忘れずに受け入れプログラムを実施していきたいと思う。

ハ. 田代雅一「インドネシアの風」

スカルノ・ハッタ国際空港の到着ロビーを出たとたん、湿気を含んだ30度のなま暖かい風に包まれながら、私にとって初めての東南アジアの旅が始まった。

旅と言っても今回の旅はJICAのアフターケア調査団という大事な任務があり、5泊6日のハードスケジュールで、のんびりとはしてられない。さらにその内の1泊はホームステイなのだ。しかし心配しても仕方がないので、とりあえず一日一日を精一杯がんばっていこうと決意したのであった。

ジャカルタに着いて驚いた事が3つある。最初に出くわしたのは、交通渋滞である。とにかく車が多い。地下鉄やモノレール等の交通機関がなく、車、乗合バス、オートバイ、バジャイ(オート三輪を改造したもの)がみんなの足となっているので必然的に交通渋滞が慢性化している。我々調査団も、滞在中はこの交通渋滞に常に悩まされることとなった。このように車が多いせいで、排気ガスにより空気が汚れている。その証拠にオートバイに乗っている人は皆マスクをしている。エアコンなしで窓を開けて走るのはとても私たちには耐えられそうにもないようだ。

次に出くわしたのはゴミである。屋台の後ろや横には必ずゴミがあり、残飯も捨てているようだ。そこら中にゴミがあり蝇がたかっているのに平気なのはちょっと驚いた。それに郊外では、川岸がずっとゴミで覆われていた。私は初めそれらを汚いと思っていた。しかし、こういう考え方もできるのではないだろうか。急激な経済成長、あまりの人口集中などのため大量のゴミが出ているが、彼らにとってのゴミとは元来、自然が浄化するものなのである。

最後は、なんといってもトイレである。インドネシアでのトイレとは、いわゆるトイレと洗面所、お風呂の3つの機能がひとつになった部屋のことをいう。

その部屋には、水をためておく水槽がある。川を足して流すのも、お尻を洗うのも、はたまた体を洗うのも水槽の水をひしゃくでとってその水で洗う。従ってトイレの床は常に濡れていて、それが私には初めどうにもなじめなかったが、何ともユニークかつ機能的なトイレである。

今回のプログラムの中で、一番インパクトが強かったのはやはりホームステイプログラムである。私がお世話になったホストの方は、ヘリーという29歳の公務員だった。ホームステイ中は大変貴重な経験を3つさせてもらった。

一つめは、彼は車を持っていなくて、同じ職場の先輩のナシルさん(彼は古いバンを持っていた)に運転を頼んでいた。ヘリーの家はホテルから1時間30分くらいのところで、家は国から支給してもらっていた。(国から支給してもらう家はかなり郊外になるらしくそれが嫌な人は自分で家を買らしい。)車に乗ると、ナシルさんが「インドネシア、パナス(インドネシアは暑い)」といて、かまわないから窓を開けるとジェスチャーで私にいった。ホテルから30分ほど舗装道路を走ったところで、急に細くて舗装していないでこぼこ道に入った。その道を1時間ほど、排気ガスと土埃の混じった自然のエアコンに、私は背中を伝う汗とインドネシアの風を感じていた。

二つめは、トイレの印象が変わったことである。インドネシア式トイレといえば、公共のトイレしか見てこなかった私は、一般家庭のトイレに入ってその印象が変わった。トイレの床全体が濡れてはいるが、非常にきれいにしているのである。彼らは家ではほとんど裸足で生活しており、また気温が高いのも手伝って、トイレの床が少々濡れていようが、洗ったお尻が濡れていようがすぐ乾くのでお構いなしのようだ。実際生活してみると、彼らのトイレの方が常に掃除をした後のようで非常に清潔ではないかという印象さえ感じられた。さらに、水でお尻を洗うのは、今、日本ではやりのウォシュレットと同じではないか。そう思うと、快適に過ごすことができた。

三つめは、彼らの心の暖かさである。行くところどこでも大変な歓迎を受けた。座ればたちまち料理やお菓子が所狭しと並べられ、飲み物がでてくる。私が暑そうにしているとどこからか大きな扇風機がでてきたりして、私に非常に気を使ってくれた。ナシルさんの家でも奥さん手作りのインドネシア料理でめいっぱい歓迎してくれた。

今回の派遣で感じたことは、KAPPIJAのメンバーだけでなくその周りの人達にとっても日本は特別な国になっているのだということだ。KAPPIJAのメンバーにとって日本での体験、特にホームステイプログラムは大変すばらしいものであったと同時に、その周りの人もKAPPIJAのメンバーを通して日本に特別な思いを持ってきているようだ。

5泊6日の短い滞在ではあったが、JICA事務所、日本大使館、学校、福祉施設訪問やホームステイを含むハードスケジュールは、KAPPIJAのメンバーがいかに私たちにジャカルタのこと、インドネシアのことを知って欲しいか、そして彼らが青年招へい事業にどれだけ感動したかをあらわしている。

このJICAの事業は、地道ではあるが着々とインドネシアと日本の青年たちの懸け

橋となっている。そして今後、必ずこの成果が現れてくるだろう。私はその表れの第一歩である友情を、今回の訪問でひしと感じた。

最後のスカルノ・ハッタ国際空港で吹いてきたインドネシアの風には、彼らの優しさや友情が混じったなつかしいにおいがした。その風を受けにインドネシアにまた行きたいと思ったのは私だけだったろうか。

二、白川春海「ホームステイをする立場となって」

私の海外でのホームステイ体験は、スリランカ、韓国に次いでこれが3回目である。ホストファミリーとしての受け入れ経験も10ヶ国ほどあるので、初めての国でのホームステイといってもさほどの不安はなかった。というよりは、不安な点は整理されていた。ホームステイ受け入れのボランティアグループに入会するときに最初に尋ねられたのは次の3点、「ゲスト用に個室はあるか」「トイレは水洗式か」「英語は話せるか」(これらが入会の条件というわけではない)であったが、今回のホームステイに当てはめてみると、まず、ホストは英語力の条件をクリアして来日した経験を持つ帰国青年であるから言葉の心配はないし、また個室が与えられても暑くて結局開け放して寝た経験を持っているから、これらはあまり問題ではない。ただ、トイレについては、水洗式以前のトイレで育った私としても、やはり不安であった。

また、トイレの他に飲み水と蚊が、私の不安点で、今回のホームステイのために私が特に準備したものは、(トイレ用の)ペーパー、ミネラルウォーター、そして虫除けスプレーであった。実際、言葉については、帰国青年を含め、家族4人が英語を話し、私の英語力を最大限とするコミュニケーションはできたし、立派な個室も与えられた(やはり閉めきって暑くて、折角の個室も無駄であったが)。ミネラルウォーターはもちろん、虫除けスプレーも大活躍し、予想的中であった。トイレは完全冷水洗浄水洗式、もっと具体的に言うと、使用後には水で局部を洗浄する方式で、ペーパーはなかったので、やはり私にはペーパーが必需品となった。

ところで、インドネシアの青年が来日したとき、日本のトイレについて、彼らがどう感じているかを配慮した家庭はあっただろうか。普通の水洗式便器を備えた家庭では、インドネシアのトイレより悪いはずはないと思い込んで、彼らが日本のトイレに不快感を味わっているかも知れないと不安に思った家庭はおそらくなかったのではなかろうか。実は、欧米人来日の折りには驚嘆の的になる温水洗浄式便器でさえ、青年にとっては、温水と冷水の差こそあれ、そして電動と手動の差こそあれ、ようやく自分たちのレベルまで来たかという程度にすぎないのである。今私は、トイレでの習慣が異なるという私自身が不安に思ったこの切実な問題が、彼らにとって、私とは全く同じ意味(但し、方向は逆)で深刻であったらうと思っている。

飲料水については、私たち日本人が海外旅行にでかけるときに、「水道の水を飲んではいけません」としつこいほどの注意を受ける。ホームステイに来る外国人に対して、「日本の水道水は安全だからそのまま飲むことができますよ」と告げるとき、私はいつも何だか誇らしい気分になっていた。けれども、今回インドネシアの帰国青年から、「日本の水道水は塩素の臭いが気になってどうしても飲めなかった」と聞いたとき、私は愕然とした。私が外国人を迎えるときに、ミネラルウォーターを準備したことは一度もなかったからである。私が平気で彼らに勧めていた水を、安全ではあっても不快に思ったゲストがいたかも知れないことに、私は今回ようやく気がついたのである。

外国の家庭にホームステイするからには、異文化の中に飛び込むという覚悟が当然必要ではあるが、異文化を紹介する役目を担う受け入れる側にとっても、自分たちはごく当たり前のことがゲストにとって意外に苦痛かも知れないと思いやる必要性をあらためて感じている。

ホ. 船戸俊明「アフターケア派遣を終えて」

この調査団に参加するに当たり、私は2つのことで期待に胸を膨らませていた。その1つ目は、この調査を通して非常に貴重な体験をすることができるのではないかと考えたことにある。なぜなら今回のような調査というものは、自分にとって今まで関わることのなかったものだからである。これは自分の人生に新たな経験を加えるまたとない絶好の機会だと思った。そして2つ目は自分の視野を広げられると思ったことにある。私はこれまで所属先である東京都世界青年友の会での定例会(勉強会)を通し、留学生と文化の違い等に関する意見交換を行ってきた。それにより自分と彼らとの価値観の違いを知ることはできた。しかし今回インドネシアを訪れることでその違いを実感としてとらえることができるのではないか。そしてさらにはそれを通し、日本での勉強会の時とは違う、より考えを深めたような形で物事を見ていける気がする。そしてその認識をより深めていきたい、と思ったからだ。しかし日程が近づくにつれ、当初のその気持ちにプレッシャーが加わってきた。自分が調査団員としての責任をきちんと果たすことができるかという不安が強くなってきたためである。

そしてその気持ちは派遣期間中も私の中から消えることはなかった。しかしその一方で調査中、私は次の3点について強い印象を受けた。

第一に、コーディネーターが作成したプログラムの完成度の高さである。これには感心せざるを得なかった。それは私たちが訪問すべきところ、そして私たちに知ってもらいたい、分かってもらいたいと思う気持ちがきちんと伝わってくる、内容の充実したものに仕上がっていたからだ。例えば、インドネシア政府機関訪問により、イン

ドネシア側が招へい事業をどの様にとらえているかが分かった。また、私たちの滞在機関がやや短いものであるため、渋滞による時間的ロスを極力小さいものにする、という配慮がきちんとなされていた。そしてその配慮の結果、移動距離を極力短くするために今回の視察範囲はジャカルタ市内に限られたが、その内容は非常に濃いものであった(現地での渋滞のすさまじい状況を踏まえると、これは正しい選択であったと思う)。今回のプログラムを素晴らしいものにする事ができたその原動力には、彼らの積極的な取り組みがあったからこそのものだと感じた。

第二には、貧富の差が大きい国であると実感した。これは主に福祉施設の訪問から知ったことだが、街並みからもそれは感じられた。市街地には絢爛豪華なホテル、オフィスビルが立ち並ぶビジネス街がある。しかしそのすぐ近くにはスラム街がある。これは私たち団員が宿泊したホテルから確認できる程の至近距離であった。

そして第三にはインドネシア人の、宗教を通しての労働に対する価値観である。JICAプロジェクトを訪問した時に知ったことだが、彼ら、特にイスラム教信者は宗教を中心とした生活を送っている。(キリスト教徒が日曜日に教会へ行くように)金曜日はお祈りの日に充てるため、仕事は休みにするというのである。実際私たちはイスラム教寺院に足を運ぶ数多くの信者を見た。更に、業務時間内でもお祈りの時間になると仕事は一時中断し、お祈りのために時間を充てるのである。これは彼らの文化であるが、仕事に対する自分の認識と彼らのそれとが全く違うものであると感じられたため、私には驚くべき事実であった。しかし同時に、仕事に対する自分の認識を改めて考えさせられる機会を持てた。その他、人生などについて考えさせられるようなことが多々ある調査であった。

そしてこのアフターケアを終えた今、私は主に二つのことを心掛けている。一つは、今後の合宿セミナーに望む態度である。というのも、東京都世界青年友の会では(財)世界青少年交流教会(WYVEA)が受け持つ招へい事業内の合宿セミナーに毎回参加者枠をいただいている。であるから今後、私が合宿セミナーに参加させてもらうときには相手国の文化、国勢などを事前に知っておくこと、更にはその分野における日本と相手国の事情についても把握していくような、積極的な態度で望んでいきたいと思う。また、本会の、合宿セミナー初参加の人に対しては、WYVEAから私たちの会に出席者枠をもらっている意味をしっかりと伝え、これらのことをできる限り伝えていきたいと思う。そしてもう一つは自分の将来についてである。就職活動を控えている私としては仕事観、更には人生観をはっきりと持ち、様々な社会活動やボランティア活動を通じ、立派な社会人になろうと決心した。

(3) 提言

イ. 青年招へい事業の共通プログラムについて

① 問題点

日本の財政削減でODA事業も削減対象となった。しかし、青年招へい事業は非常に好評であり、インドネシア内閣官房を訪問したおりにも、もっと多くの青年を長く滞在させてもらいたいとの意見を聞いた。また青年達の報告書やKAPPIJAの青年達との話の中でも都内分野別及び地方プログラムでの専門分野に関する視察やホームステイの拡充を強く希望していた。また今後の交流を深めるためにも継続かつ充実させていかねばならない。

② 問題点の原因または理由

招へい青年は日本に約1カ月滞在するが、その半分は東京にいる。東京での宿泊費は高く、必然的に滞在費もかかる。

③ 改善のための具体的方策

ASEAN諸国からの招へい事業は歴史も長く、日本に対する知識も深まってきたので共通プログラムを縮小し、都内団体と地方団体の連携で効果的な専門分野の充実を図り、都内や地方プログラムで専門分野を拡充する。あるいは共通プログラムを現地プログラムに切り替えて行うことによって、滞在費用を下げるができるのではないかと思う。

ロ. 青年招へい事業の単一国グループから混成グループへの枠組み変更について

①・② 問題点及び問題点の原因または理由

単一国のグループはまとまりも良いため、受け入れする場合は楽であるが、グループごとにまとまってしまう、同時期に来日している他の国の青年との接触がほとんどない。ASEAN混成に参加したメンバーのひとは複数の国でチームを作ることにより多くの友人と交流することができるという自信を持って言っていた。また青年の船にも参加したメンバーも同様なことを言っていた。

③ 改善のための具体的方策

単独チームの受け入れは地方団体にとっては非常に楽であるが、ASEAN諸国のように均一したまとまりがあり、実績もある国々は基本的に混成チームとすることを考えても良いのではないかと思う。またKAPPIJAのようなOB会を他の国にも広げるためにも有効ではないか。

ハ. 青年招へい事業の自主研修時間の増加要望について

①・② 問題点及び問題点の原因または理由

今回のアフターケア事業で痛感したことであるが、5日間であってもハードなプログラムになると体力面で厳しい。移動による体力の消耗と現地の風土に体が慣れるまでは多少余裕がほしい。その点では招へい青年が地方に移動する場合も同じである。彼らには1週間に1日の自主研修日が設けられているが、6日間はスケジュールで詰まっており、ホームステイも含まれている。精神的な疲れや体力の消耗も激しいと思う。地方プログラムによっては、青年達が到着した日に表敬や歓迎会を開催する。するとそれ以後のスケジュールが体力面で相当厳しくなる。またホームステイに入っても緊張の連続である。

③ 改善のための具体的方策

自主研修日については、あと半日増やしても良いのではないかと思う。地方に到着した日はプログラム説明くらいにして何もスケジュールを入れない。自主研修の時間に散歩などで地方の風土に慣れ、移動の疲れも取り除く。それによってその後のスケジュールも元気にこなせると思う。要は地方プログラム担当者の企画しだいであるが、1日半の自主研修があると過密にならない日程を作りやすいのではないか。

マレーシア

平成9年12月8日～12月14日

とまこまい国際交流センター

1. 調査目的

1. 調査目的

- ・ 帰国青年との再交流を通じ、日本での研修成果のフォローアップと日本理解の増進を図る。
- ・ 日本側のカウンターパートと帰国青年との再交流を通じ、本事業を相互の青年交流へと発展させる。
- ・ 帰国青年同窓会との交流を通じて、相互の協力関係の増進を図る。
- ・ 青年の所属先関係者に対し、事業の理解の促進と青年への支援を働きかける。
- ・ 関係者との意見交換や相手国事情の理解を通じ、今後のプログラム改善に寄与する。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency, JICA) 事務所

- ・ マレーシアの一般事情、JICA の活動状況及び青年招へい事業運営状況概説

(2) 日本大使館表敬訪問

- ・ マレーシアの政治・経済・社会状況と大使館の役割の聞き取り

(3) マレーシア帰国青年同窓会 (Persatuan Alumni Malaysia-Japan, PAMAJA)

- ・ 組織活動状況、青年招へい事業に関する意見交換と要望事項の聞き取り

(4) 教育省 (Ministry of Education, Malaysia)

- ・ マレーシアの教育事情の訪問調査

(5) 帰国青年活動現場 パーム油研究所 (Palm Oil Research Institute of Malaysia, PORIM, Ministry of Primary Industries, Malaysia) 視察

- ・ 帰国青年が滞日経験をどのように職場や帰国後の生活に活かしているかを調査する。

(6) マラヤ大学予備教育部日本文化研究館 (Special Preparatory Programme to enter the Japanese Universities, in Science University of Malaya)

- ・ 当館の機構と活動状況の聞き取り

(7) 国立青年研修センター (The Peretak National Youth Skills Training Institute, Ministry of

Youth and Sports, Malaysia)

・当センターの機構と活動状況の聞き取り

3. 調査団員

	氏名	所属先	青年招へい事業との関わり
リーダー	本間 敏彦	和幸建設株式会社代表取締役 とまこまい国際交流センター会長	分野別地方プログラム担当者
メンバー	椿 勇喜	苫小牧市役所財政部資産税課主事 とまこまい国際交流センター副会長	分野別地方プログラム担当者
メンバー	富田 聡子	苫小牧市役所福祉事務所保護課主事 とまこまい国際交流センター理事	分野別地方プログラム担当者
メンバー	百瀬 勉	苫小牧市役所企画調整部国際交流主幹 とまこまい国際交流センター会員	分野別地方プログラム担当者
メンバー	田中美登里	(財)札幌国際プラザ職員	分野別地方プログラム担当者

II. 調査結果

1. 日程

12月8日(月)

13:00 成田空港発(JL723 便)

19:20 スパン国際空港(クアラルンプル)着

20:55 パンパシフィックホテル(The Pan Pacific Hotel)チェックイン

12月9日(火)

08:45 ホテル出発

09:00 JICA マレーシア事務所訪問

10:00 在マレーシア日本国大使館表敬訪問

12:30 昼食(於 Cili Padi タイ料理レストラン)

14:20 ホテル発

14:30 マレーシア帰国青年及びPAMAJA 会長と打ち合わせ
(於 人事院東方政策課)

17:00 ホテル着

19:30 ホテル発

- 20:00 マレーシア帰国青年及びPAMAIA主催歓迎夕食会
(於 レストラン Nelayan Titiwangsa)
- 22:30 ホテル帰館

12月10日(水)

- 09:45 ホテル出発
- 10:15 教育省訪問
- 12:30 昼食(於 金燭海鮮餐室 中華料理レストラン)
- 14:30 パーム油研究所(PORIM)訪問
- 16:30 ホテル着
- 17:15 ホテル発
- 17:30 中央市場着
- 19:00 夕食(於 マレイ料理レストラン Rasa Utara)
- 21:30 ホテル帰館

12月11日(木)

- 10:00 ホテル出発
- 10:30 マラヤ大学日本文化研究館着
- 12:30 JICA マレーシア事務所長主催昼食会
(於 パンパシフィックホテル内日本料理店 櫻)
- 14:00 クアラルンプル(KL)市内視察
(KLタワー～中央駅～王宮～国立博物館～国家記念碑)
- 17:15 ホテル着
- 19:00 夕食(於 石焼きグリルレストラン Stonegrill Cafe)
- 21:00 プキット・ピンタン通りへ
- 22:40 ホテル帰館

12月12日(金)

- 08:30 ホテル出発
- 09:40 国立青年研修センター訪問
- 12:30 ホテル着
- 14:00 昼食(於 ヤオハンデパート内中華料理店)
- 15:00 ツウンク・アブドウル・ラーマン通りにてショッピング
- 18:00 ホテル着

19:30 ホテル発
20:00 帰国青年との文化交流夕食会(於 レストラン Seri Melayu)
22:15 ホテル帰館

12月13日(土)

09:00 ホテル出発
09:30 国立動物園見学
12:30 昼食(於 ウタマショッピングセンター内マレイ料理レストラン Ferns)
15:00 ホテル着
16:00 ホテル発
16:30 団長主催懇親会(於 Nelayan Titiwangsa)
18:30 ホテル着
20:00 パンバシフィックホテル チェックアウト
22:45 スパン国際空港発(JL724 便)

12月14日(日)

06:00 成田空港着

2. 主要面談者

(1) JICA マレーシア事務所

西牧 隆壮 所長(Resident Representative)

(2) 在マレーシア日本国大使館

内田 晃 二等書記官

(3) PAMAJA 会長及び帰国青年との打ち合わせ

Mr. Abdul Rahman Bin Abdul Razak	PAMAJA 会長
Mr. Che Yusoff Bin Che Hassan	97年度帰国青年(教育グループ)
Mr. Mohd Yusof Bin Abdul Rashid	97年度帰国青年(教育グループ)
Ms. Siti Salibiah Bte Hj Raduan	97年度帰国青年(教育グループ)
Mr. Shahilon Bin Abd Halim	97年度帰国青年(教育グループ)
Ms. Sallina Binti Hussain	97年度帰国青年(教育グループ)
Mr. Noor Azhar Bin Ahmad	97年度帰国青年(教育グループ)
Ms. Hajjah Rohaida Bte Tamin	97年度帰国青年(教育グループ)

Mr. Shahril Bin Asan Barseni 97年度帰国青年(教育グループ)
Mr. Asram B Sulaiman 97年度帰国青年(教育グループ)

(4) 教育省

Dr. Halim Ahmad Ph. D Principal Assistant Director,
Educational Planning and Research Division
Mr. Badaruzaman Abu Bakar Assistant Director,
Educational Planning and Research Division
Mr. Zaidi Abdul Hamid Assistant Director of Curriculum,
Curriculum Development Center
Mr. Asariah Mior Shahrudin Assistant Director,
Teacher Education Division
Mr. Ishak A. Rahman Senior Organizer of School Division
Mr. Azwan Aziz
Mr. Suhaim Md. Afri
Mr. Zaljiah Abu Chik
Mr. Azmi Bin Dir EPRD

(5) パーム油研究所 (PORIM)

Mr. Haj. Hussin B. Saleh Public Relations Officer 広報担当官
Ms. Wan Azwati

(6) マラヤ大学 予備教育部 日本文化研究館

Assoc. Professor Mohd Said Mohd Kadis Director
Dr. Azaizan Ismail Chairman of Physics Division
Mrs. Zaimi Mohd Noor Chairman of Biology Division
Mrs. Siti Asiah Ahmad Junan Representative of Chemistry Division
Mr. Noryati Abd Shaffar Assistant Registrar

日本文化研究館

大森 英治 日本政府派遣マラヤ大学日本人教師団団長
神沢 淳 カリキュラムコーディネーター
吉村 忠彦 数学担当
安里 辰洋 数学担当
深谷 茂樹 数学担当

小野 悟 数学担当
 砂田 透 数学担当
 久保山文典 物理担当
 田熊 直樹 物理担当
 原田 幸雄 物理担当
 田中 英朗 世界史担当
 飯塚 達雄 副団長、日本語担当
 森西志保子 日本語担当
 佐々木智子 日本語担当

(7) 国立青年研修センター

Mrs. Azizah Bti Ab Lah	Director
Mrs. Rahim Derawan	Executive Officer
Mr. Ibrahim Hassan	Human Development Director
Mr. Mohamad Jaofar	Men's Tailoring Teacher
Mr. Muzakir Ibrahim	Assistant Caterers Teacher
Mr. Faizul Raginean	Stewards and Captains Teacher
Mrs. Norah Ismail	Hair Stylists Teacher
Mrs. Zariah Abdl Rahim	Dress Making (Ladies' Tailoring)
Ms. Zalifah Md Jais	Dress Making (Ladies' Tailoring)

3. 調査結果概要

- ・ 今回の調査では、国際協力事業団をはじめ、日本国際協力センター、PAMAJAのラーマン会長並びに会員そして97年度マレイシア教育グループの青年達の協力のもとに、マレイシアの国情の理解を深め、青年招へい事業に関する貴重な意見交換をした。
- ・ 帰国青年の活動状況視察に関しては、パーム油研究所の帰国青年たちが出張中で面談できなかった。帰国青年同窓会との面談相手は、会長、副会長ら幹部と97年10月苫小牧を訪問した教育グループが主だった方々であったため、青年招へい事業一般の課題というよりは苫小牧とマレイシアの交流に話題が集中した。
- ・ クアラルンプルに一週間滞在し、マレイシアの各種の職場で活躍している方々に会い、現地で働いている日本人達と話をし、今後のプログラム改善に自身を深めた。またPAMAJA会長及び帰国青年との懇談のなかで相互交流及び青少年交流を協力し合う話し合いがなされた。

4. 現地・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

イ. JICAマレーシア事務所

西牧所長に訪問目的を述べ、調査団の構成メンバー表、訪問団体紹介パンフレット等を渡し、マレーシアの一般事情・JICAの事業内容をお伺いした。

所長との会談内容要旨は下記の通り：

イギリスの植民地時代の影響で全体的に清潔な街並みであり、インフラは比較的整備されて都市と農村との差があまりない。民族構成はマレイ系60%、中国系26%、インド系8%よりなる。所得の多い順序は中国系、インド系、マレイ系であるため人種間、地域間の所得格差是正が最大の課題である。このため人種間の調和と安定を図るため「ブミプトラ(土地の子)政策」によるマレイ人優遇政策を採っている。マハティール首相の登場により、それまでの欧米に向いていた外交政策を日本、韓国の近代化を手本にして、マレイ系国民を教育、訓練し、真の実力を備えさせることを目的とした「東方政策(Look East Policy)」が採られた。1998年にクアラルンプルで開催される英連邦スポーツ競技大会(Commonwealth Games)に備えて公共施設整備の為、市内各所が工事中で、東京オリンピック直前の東京の様である。

ロ. 在マレーシア日本国大使館表敬訪問

内田二等書記官に大使館の役割とマレーシアの国情を以下の如くお聞きした。

大使館は国と国との外交交渉の窓口で、12月14日に橋本首相が創設30周年を迎えたASEANの非公式首脳会議に出席のため来訪され、この準備で多忙となる。大使館には大使以下公使、参事官、書記官など31名が勤務しており、警察庁、自衛隊から出向して総務部・政務部に、通産省・大蔵省から経済部に、法務省の入国管理局から領事部へと配属されており、更に邦人の事故・盗難を扱う管理部そして広報文化部からなる。

マハティール首相の外交政策は、ASEAN協力の強化、イスラム諸国との協力、非同盟中立・南々協力、対外経済関係の強化が基本。また、欧米の大国主義を批判し、小国・途上国の立場・権利の擁護を主張する姿勢が見られ、アメリカとは意見を異にすることが多い。

アフリカ諸国にプロトン(国産車)の輸出を推進中であり、今後サービス・情報産業中心に軸足を移した時は日本のライバルとなる。通貨や株価の暴落のため現在公務員の海外出張の制限やクリスマスや年末年始の海外旅行の制限等の首相発言があり話題となっている。

首都圏一極集中を緩和するため、現在進行中のプロジェクトとしては、クアラルン

ブル(KL)の南50キロに来年開港予定のKL新国際空港、KL都市部の交通緩和を目的としたKL都市交通(高架軽量鉄道)KLの南25キロに首都機能に移転するプトラジャ新行政都市、インターネットによる電子決済を利用した面積15キロ×40キロのサイバー都市(電腦都市)マルチメディア・スパー・コリドーなどがある。コンピューターなどの家庭への普及はマレーシアの方が日本より進んでいる。

マレーシアは1963年より国連軍に平和維持部隊を派遣しており、ポートディックソンの平和維持活動訓練施設には日本からも視察に訪れている。

その他インドネシアで発生した山火事による煙害へのJICAの協力、マレーシア人の国民性、日本人観等をお聞きした。

ハ. マレーシア帰国青年同窓会(PAMAJA)

人事院東方政策課の会議室においてラーマンPAMAJA会長より招へい青年の選考過程と同窓会の活動状況をお伺いした。

PAMAJAは、選抜された青年招へい事業の招へい青年に対し、東方政策課より依頼され三つの段階の研修オリエンテーションを実施している。第一段階の面接、第二段階のオリエンテーションそして第三段階の出発直前オリエンテーションである。各段階で不適格者が出れば、途中交代もありえる。

青年招へい事業は1984年に始まっているが、PAMAJAはJICA、人事院及び初期の招へい青年達の提案により1987年に設立され、初年度からつい最近までの約1,500名の会員が所属し、各分野で活躍している。現在PAMAJAの連絡事務局は人事院東方政策課にある。

ASEAN各国にも同窓会組織が相次いで設立され、それを統合したのがASEAN-Japan Friendship Association for the 21st Century(AJafa-21)である。このAJafaの設立主旨に基づき、また相互理解のための親善交流を実施している。93年インドネシアに50名、94年タイに63名、95年フィリピンに40名の友好使節団を送った。96年にはインドネシアへ、そして今年は子供達に焦点を当てたジュニア・フレンドシップ・プログラムを企画した。サマーキャンプを通じて選考した26名の中高生を9日間日本に派遣し、熊本県と長崎県でホームステイ、学校訪問等を経験させている。

AJafa-21はASEAN各国の同窓会のネットワークとして機能しており、マレーシアのPAMAJAがその事務局を担っている。PAMAJAは日本の各団体がASEAN各国を訪問する場合AJafaがその橋渡し役をしたいと考えている。

今年10月に苫小牧を訪問した教育グループ25名のうち9名がマレーシア各地より集まってくれた。その中で今後役に立つ意見を以下に述べる。

・視察先について

東京で訪れた文教大学は都会のキャンパスの狭い大学だった。北大のような広いキャンパスの大学も見なかった。教育とは直接には関係ないかもしれないが、漁村の様な寂れた所も訪問したかった。

・ホームステイについて

沢田お土産を用意したので、独身者の家庭よりも多人数の家族のいる家庭を訪問したかった。日本へ出発前にホームステイの家族構成などを知っていればプレゼントの数の用意が可能である。また、マレーシアでは日本人はもっと伝統的な生活をしていると思っていたが、予想以上に西洋化していたので驚いた。

・マレーシアの伝統芸能紹介について

準備、練習そして発表の時間が足りなかった。

・帰国後研修の成果をいかに生かしているか

各事務所で色々な人に自分の経験を話している。

イスラム教育局の局内紙に「日本におけるイスラム教の価値観」というコラムを担当し、「日本人といっても感じるものは私たちと同じものなので、日本人を理解することは難しいことではない。」という趣旨を述べたら、みな驚いて色々聴いてきた。今後もコラムを担当することになった。来年の1月に図書館関係の研究発表があり公立図書館を訪問したときの資料を報告し、日本の司書活動について紹介する計画である。

日本が清潔できれいなこと、時間管理、効率的な運営などが印象的であったので学校内、トイレ、校舎周辺をきれいにしようという運動を起こしている。

小学校教師として同僚や生徒に日本の良いことを色々話している。

三. 教育省訪問

マレーシアの教育概要についてのビデオを見た後、意見交換を開始した。

・「日本における英語教育では実用英語としてはあまり役に立っていないのが実情だが、この点マレーシアでは実用英語の教育はいかに行っているか？」

「マレーシアにおける英語は外国語ではなく、第二母国語としての位置づけである。【Teacher Support Team】という組織があり、英語教師養成に当たり、Twin Programといわれるプログラムでマレーシアで2年間学んだ後イギリス・ニュージーランドなどで2年間実地に英語を勉強する制度をとっている。小学校の7才から英語を必修科目として教え、小学校で週240分、中学校で週200分、Reading, Writingそしてコミュニケーションを教えている。授業以外に「英語を話す日」や英語弁論大会などのプログラムもある。教員養成大学では英語は必修科目である。また生活面でも両親と英語で話すこともよくあるし、TV・映画でも英語に触れる機会は多い。」

・「日本ではいま少子化や核家族化により子供同士の交流が少なくなったのが原因と見られるいじめの問題が学校内で起きている。マレーシアにおいてはいかなものか？」

「この問題は程度の差こそあれ、全世界的な問題となっている。学校での指導を徹底したり、規律訓練を通じて防止に努めている。また、宗教教育や道徳教育については日々の生活の中で教えている。マレーシアでも、都市部と農村では隔たりはあるが、やはり核家族化の傾向は見られる。他の子と一緒に遊べない子供が現れてきており、授業以外に遊ぶサークル活動を週2回学校で実施している。指導者には特別の訓練を受けた教師が当たっている。」

ホ. パーム油研究訪問

ラーマンPAMAJA会長が帰国青年活動現場として当研究所の訪問を企画してくれたものと思われるが、あいにく当事者は出張中で会うことができず、マレーシアの輸出主要製品であるパーム油の研究所視察が中心となった。

1979年に設立したマレーシア第一次産業省の施設で、パーム油の重要な研究と開発事業を担っている。

日本のマレーシアからの輸入品目の金額ベースで一位を占めているパーム油は、マーガリン、スナックの揚げ油、インスタントラーメンなどの食用油として、また石鹸や洗剤としても広く日本国内で消費されている。年間800万トン生産し、日本には40万トン輸出している。パーム油がいかに我々の生活の中で使われているかということにまったく無理解であった。有限の動物油である石油とは異なり、育てれば出来る植物油としてこれから益々重要性が認められることであろう。

ヘ. マラヤ大学予備教育部日本文化研究館

マラヤ大学の予備教育部(大学入学準備のための学部、戦前の日本の大学予科にあたる)の準教授モハメド・サイド部長を訪ねた。その他予備教育部及び日本文化研究館の職員、各科目の教師(日本語、物理、生物、化学、数学、世界史)約20名が同席し、マラヤ大学と同研究館の概況とともに、日本へ留学する学生への語学教育の様子をうかがった。

マレーシアの大学入学システムは、高校終了時(日本の高校2年にあたる)に行う共通国家試験の成績と複数の志望大学名を選考委員会に提出し、同委員会が学生の入学する大学を決定する方法を採っている。

当研究館は、マハティール首相の東方政策の下、1982年に日本の大学へ留学する学生の予備コースとして、日本政府の援助により開設されて以来、15年目を迎える。在

籍する学生は、2学年合わせて約300名である。

実際の日本への留学生派遣は、人事院東方政策課が担当し、この研究館は、学生が日本の大学での学習を始めるにあたり必要とされる日本語などの教育を2年間で行うことが使命である。日本に留学が決定した者は、全員がマレーシア国費留学生であるが、そのうち毎年10人程度が日本政府の国費留学生に採用されている。

日本人教師のうち日本語教師は国際交流基金から、その他の教科の教師は文部省より2年間の任期で派遣されている。

カリキュラムは、1年時は特に日本語の習得に重点を置き、週30時間の授業のうち、20時間が日本語教育にあてられている。また、2週間に1度日本事情についてのクラスもある。日本語は、全くの初歩から学び、2年間で日本の大学の授業を理解できる程度のレベルまで習得することが目標である。そのため他教科の授業は、2年生になると全て日本語で行われる。漢字の習得には苦勞しているようであるが、熱心に学んでいる。語学以外の科目については、自然科学系を専攻する学生は、数学、物理、化学を学び、社会科学系を専攻する学生は、数学、世界史、政治経済を学ぶ。これらは、日本の高校の問題集なども使用される。2年生の後半になると、授業もナチュラルスピードの日本語によって行われるようになり、授業内容は日本の高校とほとんど同様になる。また、このころになると、日本語の語学力よりも、教科ごとの学生の学力問題の方が重要になってくる。

この研究館で学ぶ学生は、日本や日本語に特別な関心のある学生が入学して来るだけに、皆、熱心に学んでいる。多くの学生は日本で工学を選考するが、帰国後は、社会的に活躍しており、企業でもいずれは経営陣として働くような地位についている。

日本への留学生制度は、日本とマレーシアの相互理解を深める有効な手段として認識されており、マレーシアの経済成長に伴い、派遣留学生の定員も50人から160人に増員されてきた。留学する学生が、日本の大学でスムーズに学習できるようによりカリキュラムを充実させることが課題である。

ト. 国立青年研修センター

イブラヒム副所長(人材開発部長)よりセンターの概要についての説明をいただいた後、センター内を見学した。

国立青年研修センターは都会から離れた山の中の全寮制の職業訓練校である。このセンターは、クアラルンプルから70キロ北に位置するクアラクバル町から10キロ程山に入ったペレタクといわれる地域の2つの川(リンティン川、セラゴール川)に挟まれた所にあり、敷地面積は約0.18平方キロである。1964年に、18歳から25歳の独身青年への職業訓練と人材開発を目的に設立された施設で教職員数60名である。

「なぜこんな山の中に」という疑問がわいたが、通訳の説明では「プミプトラ政策による国家事業である。」とのこと。農村部に多いマレイ人に職業訓練を施し、技能を身につけさせ都会に出て職に就かせるのである。

開設コースは、職業訓練コースとして、写真技術(白黒、カラー各6ヶ月コース)、メイクアップアーティスト(12ヶ月)、ヘア・スタイリスト(12ヶ月)、女性服縫製(12ヶ月)、男性服縫製(12ヶ月)、仕出し、ホテルサービス、食品加工(6ヶ月)、スナック・ケーキ加工(6ヶ月)がある。それぞれのコースごとに、写真の現像・プリント室、美容実習室、ウェイターの実習室、縫製室が設けられている。これら長期のコースのほか、1日のみの短期コースなども設けており、受講者の年齢制限はない。短期コースには、起業家養成、ナショナリスト養成(国家についての知識を身に付ける。)、イスラム教戒律教育コース、自立訓練コース、スポーツ・レクレーションコースなどがあり、今年の長期・短期あわせての総参加者は、約350名である。

学生は、このセンターで6ヶ月間一通りの技術を身に付けてから実地研修に入り、その後、資格を得ることができる。

写真技術の教師は、日本の広告代理店での6ヶ月間技術研修の経験者であり、片言の日本語を交えながらの説明があった。帰国者が各方面で活躍している様子を知ることができた。

(2) 交流会

イ. 98年度教育グループ主催歓迎夕食会

出席者 調査団：本間 敏彦、椿 勇喜、富田 聡子、百瀬 勉、田中美登里
青年：チェ・ユソフ、ユソフ、シテイ、シャヒロン、サリナ、アズハル、
アイダ、シャリル、シャル、シャルの夫、クアン、アスラム
PAMAJA：ラーマン会長、ワハブ筆頭顧問、メネット副会長

マレーシア訪問2ヶ月前に来苦した教育グループに連絡を取っていたため、サバ州、クダ州、ジョホール州などの遠方より我々調査団に11名が会いに来てくれた。また帰国後結婚したシャルは夫を我々に紹介してくれた。12月21日にはバンコル島にて教育グループの家庭を含めての再会が計画されていた。今回は都合が悪かったが、来年の帰国青年グループの再会の時期に合わせ苦小牧からホームステイの家庭を連れてやってくる約束をした。帰国後椿団員が送付した職場の月例会で日本の歌の発表の練習に使用したカセットテープは、青年代表のサリナさんからラーマン会長に日本の歌を広げてもらうために渡された。これからの相互交流を活発にするために連絡

を密にする約束をした。

ロ. JICA 事務所所長主催昼食会

出席者 調査団：本間 敏彦、椿 勇喜、富田 聡子、百瀬 勉、田中美登里
JICA事務所：西牧 隆壮所長、飛田 賢治所員

調査団よりこの日までの調査結果の報告とお礼を述べ、日本とマレーシアの習慣の違いなどについて歓談した。

ハ. 文化交流会

出席者 調査団：本間 敏彦、椿 勇喜、富田 聡子、百瀬 勉、
青 年：アイダ、エリニ、アティガ、シテイ、マハマトフシン、ヌールファ
ラヒン、ムハマドイズディン、ムハマドイズハル、クアン、ファ
ティマ

クアラルンプル到着時の出迎え、帰国青年との懇談会、歓迎会そして調査以外の時間に車を運転しての案内などしてくれた帰国青年達にお礼を述べ、今後の相互交流について歓談した。交流会にはアイダさん、シテイさんのご家族も招いて家族ぐるみの交流となった。またシテイさんには今後研修テキストを作成するにあたり英語からマレー語への翻訳を(インターネットを通じて)お願いする旨を伝え、了承いただいた。

ニ. 団長主催懇談会

出席者 調査団：本間 敏彦、椿 勇喜、富田 聡子、百瀬 勉、田中美登里
JICA事務所：飛田 賢治所員
PAMAJA：ラーマン会長、ワハブ筆頭顧問、イブラヒム副会長、スザンナ、
ハリル会員、ヒーサム会員
青 年：シテイ、アイダ

ラーマン会長より調査団の労をねぎらう言葉があった。日本に派遣したジュニア・フレンドシップがちょうど前日12月12日に帰国しその話題が中心となった。英語での日本の中高生との交流がうまくいかなかったので来年は対象年齢を少し上げ、日本語を学ばせてからの派遣を考えており、また盛岡市との交流の可能性が出来たので、苫小牧まで足を延ばしたいそうだ。今後学校の行事日程なども連絡し合い、是非とも来年の事業を成功させるよう相互に連絡を密にとる約束をした。

5. 所感および提言

(1) 調査団所感

多くの方々の協力により今回のマレーシア訪問は、我々にとって大変有意義なものとなった。JICA 現地事務所、日本大使館では事前の書物・資料などでは得られなかった情報をいただいた。現在のマレーシアを理解するキーワードとして「プミプトラ政策」「ルック・イースト政策」があげられる。多民族国家ゆえに乗り越えなければならない障害を国際化時代にうまく利用しているようにも思える。マレーシア人同士またマレー語の会話の中で時々英語が話されるのを耳にした。それぞれの民族の母国語を使いながらかつ国内でも他民族間では共通語として英語を使っている。家庭内においても英語を使うことが多々あるようだ。

招へい青年との懇談の中では日本の良さを教えられた。時間の管理、集団行動、清潔さ、車の運転の慎重さ等々。聞いていて少々面映ゆい気持ちになった。今年10月マレーシア教育グループを初めて受け入れる前から、この国の人達が日本に来て更に学ぶことがあるのだろうかとか常日頃から案じていたからである。

懇談会、交流会を通してPAMAJAのラーマン会長と何度か話をした。ちょうど我々の訪問中にPAMAJAのジュニア・フレンドシップ・チームが九州から東京へと研修旅行中でまた我々の会がホームステイを提供するのが主な事業活動であることもあり、「来年の交流事業として北海道までは是非とも行かせたい。協力をお願いしたい。」と言われ、我々も「来年末または再来年正月にはホストファミリーを連れてマレーシアを訪問する計画がある。」とお互いの交流に具体性が出て実りある交流会となった。

また今回の訪問を機にe-mailを使って連絡をとりあったが、それは今後の交流方法に強い弾みとなった。

(2) 団員所感

イ. 椿 勇喜「新しい友達、マレーシア」

◎お国柄

伝統文化の維持と近代化の両立を目指しているマレーシアは伸び盛りの国だが交通渋滞が目立ち公共交通機関の整備がこれからの課題と感じた。しかし交通渋滞下にあっても他人への思いやりの交通マナーや制限速度の順守などについては感心する点多かった。

町中での治安もよく、あまり警官の姿を見ることもなかった。日本では聞き飽きているパトカーや消防車のサイレンの音もめったに耳にすることはなかった。町の中でのゴミのポイ捨てはまったく見受けられず、くわえタバコで歩いている人など皆無である。

◎来日した青年達

帰国後まだ2ヶ月しか経過していないせいもあって、出迎えてくれた青年達と会うとまだ日本でプログラムが続いているかの錯覚を覚えるほどであった。

普段自分の乗っている車では私たち5人を乗せて移動できないと、わざわざ姉妹のワゴン車を借りて来た人。

進んで街の案内をかってでたものの、自分で暮らしている街ではないのでいま一つガイドになりきれなかった人。

平日だというのに車で4時間もかかるところからやってきて、夜のパーティが終わると強行軍でまた明日の仕事のために戻った人等々。

彼たちの熱意あるもてなしに頭がさがる思いであった。

◎パマジャの活動について

ラーマン会長をはじめパマジャの組織が、単なる仲良しOB・OGの同窓会といったものではなく、次の時代を作り上げるアジアのネットワークの中心として活動をしていきたいという意気込みが感じられた。

また、直前に受入を担当した私たちがマレーシアを訪問したことにより、パマジャが長崎や熊本へ現在派遣している青少年交流事業の訪問先として北海道にも足をのばしてみたいという言葉があり、マレーシアと苫小牧の今後の新たな交流の展開が期待される。

◎これからの交流事業の在り方について

青年招へい事業のような活気あふれる若者の交流と平行してこれからの交流事業の在り方としては、高齢者や少年といった様々な年代の交流に幅を広げ、また回数も1度きりでおしまいというのではなく、同じ人が2度3度と繰り返し訪問していくなかで相手の国に対する本当の理解が深まっていくという形も必要であると感じた。

今まで何回も招へい事業の受入を経験したが、帰国した彼らから連絡が来ることはなかった。また、そのこと自体に何の疑問も感じていなかったというのが正直なところである。それだけ、海外との連絡は難しいというのがいままでの常識だった。ところが、今回のマレーシアの受入後状況は一変した。インターネットを通じて、時差を気にせずリアルタイムでの情報交流のなかで帰国後の彼達の考えていることや、日本で聞き足りなかった部分の質問のやり取りが続いている。電子メールによるカラオケテープの依頼もきた。一見、無機質なパソコン画面の向こうには懐かしいあの人の国が広がっているのである。新しい時代の新しい通信手段による新しい交流の始まりであると思う。

今回の訪問の際、re-exchangeという言葉が盛んになげかけられた。1度きりの外国訪問でそれですべてがわかる訳ではなく、再び訪れることによって前回よりももっと

深く掘り下げた研修や交流が必要であるという考え方である。JICAの1ヶ月間のプログラムの目的の一つが諸外国との21世紀に向けた友情を構築するということからすれば、国の制度やシステムの情報の交流もさることながら、さらに人的な交流の促進を図ることが大切であると考え。そのためには帰国した青年のみならず受入側の私たち自身のre-exchangeにさらに力を入れる必要があると思われる。ホストファミリーや交流事業に参加した人々が相手の国を訪問し、実際に自分の目で見た相手国の理解を進めることで相互理解が深まるものと確信する。

ロ. 富田聡子「マレイシア人の向上心とやさしさにふれて」

今年、苫小牧において教育グループを受け入れた際に、とても気になっていたことの1つに小さい子供のいる女性の参加者がいたことである。日本では、女性は子供の手が離れるまで、外出もままならず、まして外国に1ヶ月も出かけるなんて考えられない。びっくりすると共にとても羨ましいと思っていた。

そこで今回訪問するに際しては、何故彼女たちが日本に来ることができたのか、男も女もなく勉強したいと思うときに勉強できるマレイシアという国はどのような所なのだろうかということにとても興味があった。

今回の訪問先での聞き取りなどによれば、資金などにおける男女差別はなく、産休制度もしっかりと根付いているとのことであった。生活習慣についても共働きしていれば外食は当たり前。女性も男性も、朝から外食している光景があちこちに見られた。善し悪しは別にして日本の女性像、母親像とはひと味違う面をかいま見た。

日本においても女性のみならず男性も勉強したいときにそれが許される、そういう環境が制度としてあればと・・・感じた。

また英語教育についても私などは英語を数年間習っているが、なかなかマスター出来ずにいるのに、彼らはマレイ語と英語を使い分け、さらに日本語も覚えが早いといった調子で感心してしまった。国の成り立ちからいって必然的にマレイ語、英語、中国語と話す環境があるとは言え、やはりそこにはしっかりとした教育制度が必要なわけで、そういう意味からも教育省への訪問はとても興味が深かった。今回再会できた教育グループはもちろん、歴代の参加者の同窓会のメンバーも日本語が上手でとてもびっくりした。とうに日本語は忘れていたものと思っていたが、とんでもない間違いであった。やはり言葉は通じないよりも、通じた方がいいに決まっている。英語だけで少しナーバスになりかけているところに日本語が聞こえてくると、ほっとした気分になったのを思い出す。そこが彼らの優しさの現れなのか。そして彼らの我々を迎え入れる態度にしてもとても厚いもてなしというか、日本のそれとはまったく違っていたように思う。来訪者に対し、前向きというか、何事も素直に受け入れようという

心が伝わってくるのであった。私は逆のことを考えると、自分が受け入れる側になったときの対応がどうであったかと反省させられた。私にとって見習うべきことばかりであったが、今後青年招へい事業がより実りあるものとなるよう、少しでもお役に立てればと願うばかりである。

ハ、百瀬 勉「逆体験・素描・順法精神」

早朝雪の降る北海道を出て夕方には、夏雲たなびくクアラルンプル(KL)へ。その気温差は30度に近い。苫小牧は真夏の最高気温でさえ25度そこそこ。私は冬の寒さに強いものの、暑さにはからつきし弱い。空港の懐かしい出迎えの顔、真夏の熱気と時折吹き抜ける風が心地よく、ありがたかった。10月にマレーシア教育グループが苫小牧に来て、ホテルの前の広告塔の温度表示が6度を示した夜、彼らがそれをバックに記念写真を取り合っていたことの逆体験だ。彼らには冷蔵庫状態だったのだろう。

KL2日目の朝、明るくなった7時頃から2時間ほど、散歩に出てみた。商店街はまだ閉店状態であるが、食堂は活気を呈していた。仕事へ向かう人々が朝食をとっていた。後ほど我々も挑戦したインド料理や中華料理店である。ホテルの朝食が約30RM(約1,200円)だが、これらの店だと10分の1で食べられる。物価がとても安い。バス停で大勢の人が待っていた。女性のほとんどが民族衣装にスカーフを被り、顔面しか出さない独特のスタイルである。足下はサンダルに素足。車道は片方だけ車が渋滞し、ほとんど運転者しか乗っていないから、明らかに通勤ラッシュである。交差点では警察官が交通整理をしていた。

イスラム教が国教でありながら、信教は自由だという。彼らのホームステイを手配するとき、「犬」を飼っている家庭はお断りとした。中国人商店街で数匹の犬を見た。それも放し飼である。そのそばを通勤途中のイスラム女性が通るが、彼女は遠回りするでもなく平然と直進した。日本の犬だと吠えたり、近寄って来るが、そんなこともせず、悠々とじゃれ合っていた。

滞在中毎晩のように雷鳴が轟くスコールに見舞われたが、出勤する人々の手に傘はない。

私たちなら天気予報に従い、当然持ち合わせるべき常識と思っているが違う。もともと傘など役に立たない程激しく、日本流には集中豪雨である。この国の人々には単なる通り雨でどこかで雨宿りすればという程度なのだろうか。私はもの珍しげに写真に収めたが、その凄じさは伝えられそうもない。道路脇にはコンクリート製の側溝があり、排水機能を果たしている。あの猛烈な雨は、大きな水たまりや泥んこ道を作るでもなく、多少路面を湿らせた程度で何事も無かったかのようにどこかへ流れ去ってしまった。

この国では、たばこの吸い殻の投げ捨ては厳罰で、罰金どころか即収監だという。公共施設やレストランなどおよそ人の集まるところでは、わずかな場所以外全面禁煙。道ばたに吸い殻も空き缶のポイ捨てもない。罰則が厳しいせいもあるが、日本人とは違った人々のあつい宗教心に基づく、順法精神豊かな国民性の一端を見せられたようだ。

二. 田中 美登里「マレーシア調査団に参加して」

まぶしい太陽の光を浴びてきらきらとそびえ立つツインタワー。郊外に林立する新しいコンドミニアム。郊外型ショッピングセンターや都心の建設現場が目を引くと同時に、ところどころに屋台や市場が立ち並び、昔ながらの活気を見せている。100年程前に建設された、やしの木の緑に調和する美しい中央駅は、かつての植民地時代の風景を想像させる。私たち調査団が滞在したクアラルンプル(KLとよばれる)は、未来となつかしさを同時に感じさせる街であった。

まず驚いたことは、街が眠らないということ。朝7時頃、食事をおねてホテルを出て散策したが、屋外食堂で食事をする人が多い一方で、もうこの時間から、バスを待つ人々の行列ができています。仕事は、だいたい8時半や9時から始まるようなので、渋滞に備えてのことであろう。確かに、渋滞のおかげで車のスピードは時速50キロもない。現在、モノレール建設工事がすすめられてはいるが、交通機関はバス・タクシー・自家用車に限られており、渋滞はKLの名物であり、課題である。この渋滞は、夕方スコールの後などはもっとひどくなり、都心部では夜まで続く。というのも、デパートやショッピングモールが夜9時半から10時までオープンしているのである。また、夕食の時間は8時が一般的なようで、10時を過ぎても屋台などで食事をする光景は少なくない。「ここでの10時はまだまだ夜遅い時間ではないのよ。」と、初日の歓迎夕食会をともにしたアイダさんの言葉に何ともタフなみなさんなのだろうと驚いた。そういえば、札幌で受け入れたASEANグループの皆さんも、程度の差こそあれ、夜の自由時間を楽しんでいたようだ。

このほかに、いくつかの習慣の違いを知ることができた。例えば、マレーシア人は、一日5回食事をするそうである。視察などで訪問したときに、お茶やお菓子だけでなく、軽食が出されたことがあったが、午前10時頃は第2食目の時間とのことである。昼休みは午後1時から2時半までだそうで、夕食が夜8時であることもうなずける。また、食事は外食が多く、働く女性が家で料理を作らないことは珍しいことではないようである。女性がどのように働いているか、詳しく話し合う時間がなかったことは残念であったが、教育関係者と接する機会が多かったからか、多くの女性が仕事にボランティア活動にと活躍する様子をうかがい知ることができた。

さて、帰国青年との意見交換は、今年の10月に苫小牧市でのプログラムへの参加者とのものであり、苫小牧側が直接感想を聞くというものだった。これまでは、数年前の訪日者との懇談であったようだが、より具体的な感想を聞くことができることは有意義なことであると感じた。PAMAJAは、招へい事業だけでなく、独自の交流プログラムの企画など、日本との交流について熱心にすすめており、在マ日本人向けのホームステイの紹介など、広く行っているようである。

多くの青年の感想としては、日本のタイムマネジメントを見習いたいということと、ホストファミリーや地元の青年との交流により、直接日本人と知り合い、文化や風習にふれられたことが印象深いようであった。また、日本を訪問したことをきっかけに、職場で日本社会についての紹介をしたり、日本の組織との窓口の担当になるなど、活躍の場を広げている様子もうかがえ、青年招へい事業での1ヶ月間の日本滞在の重みというものを実感することができた。また、彼らが、逆に自分たちの文化を紹介することへの熱意も感じられた。

クアラルンプルで再会を果たすことができたテーさんは、日本のどんなところでも笑顔と接することができたことが一番なつかしい、と語っていたが、私自身にとっても同様、一番忘れがたいことは、いつも私たちをあたたかく迎えてくださり、夕食や自由時間を共にしたマレーシアの帰国青年の皆さんとの時間であり、彼らの笑顔であり、温かさである。

今後、世界情勢は刻々と変化していくであろうが、遠い国の見知らぬもの同士が直接出会う、というシンプルな喜びはいつまでも変わらないことではないだろうか。この青年招へい事業が、相互の出会いと、友情をはぐくむきっかけの場として定着していくことを願ってやまない。最後に、この調査を支えてくださったすべての皆さんに深く感謝申し上げたい。

(3) 提言

イ. 問題点

- ①マレーシアは青年招へい事業1984年から14年間も招へいされている。多くの招へい青年がおり、同窓会の会員も1,500名に上る。
かつて招へいされた青年の再招へいの希望が昨年から出されている。
- ②招へい事業を機に相互訪問の機運が非常に高まっているが経費面がネックとなっている。
- ③アセアン諸国で招へい青年の同窓会同士のネットワークが出来上がっており、相互の交流もされている。マレーシアが連絡事務局をしているが、日本側にはそれに対応する体制がない。

ロ. 問題点の原因又は理由

- ①色々と経験を積んだ今もう一度かつて訪問した日本を別の角度から眺めて見たい、そしてその経験を新しい見地から役立てることが出来る。
- ②日本での滞在費の高さ
- ③日本国内における連絡体制手段の未整備

ハ. 改善のための具体的方策

- ①相互交流を盛んにする為に、もしも、予算化、事業化が可能であれば今回のアフターケア調査団の逆方向の少人数で短期間のフォローアップチームの招へいを考えてはいかがか。
- ②ホームステイや安くて良い宿泊施設を提供する。
- ③日本各地にも招へい青年受入団体のネットワークを早急に作り、インターネットによる相互協力をして受入体制をつくるべきである。